目次

尼港事件に就て（時言）……本多日生
一、國家的問題……二、問題の根本……三、敵の所在……四、思想戰の實國奴……五、國民覺醒の秋……六、バルチザンの惡害……七、唯物的文明の災禍……八、日本國の天職……
危險思想に對する警戒……本多日生
思想の善導に就て……佐藤鐵太郎
佛教信仰の正統……本多日生
照顧脚下……山内櫻溪
社會道德と國家道德との調節……本多日生
滿洲に於ける社會政策……井上清純
記事、報道十數件

第廿四年八月號

統一第三百四號
明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可
大正九年七月一日發行（毎月一回一日發行）
發行人 東京府荏原郡品川町南品川四百十二
印刷人 東京市麻布区霞町二番地 渡辺秀吉
印刷所 東京市麻布区霞町二番地 渡辺秀吉
（▲本誌定價一部貳拾錢郵税壹錢▼）

佛告げたまはく、四法あり、在家の人をして現世の報を得、利益の業を獲せしむ。何をか謂つて四となす、一には能く精勤し、二には能く諸根を守護し、三には善智識を得、四には正理もて養命す。云何が精勤なる、所作の業に隨つて家計資生し、或は王の臣と爲り、或は農夫と爲り、或は復治生し、或は復牧人たり、其の所作に隨つて劬勞を憚からず、寒暑風雨飢渴飽滿蚊虻蠅蜂ありて勤苦ありと雖も作業を捨てず、成業の爲の故に、終ひに休廢せず、是を精勤と名く、其の財物を知つて其の多少を量り、其財用を節して入るは出づるより多くして、苟くも輕しく用ふること莫れ、不奢不儉是れを正理養命と名く。

（別譯雜阿含經正大藏十三套の九）

時言

尼港事件に就て

本多日生

目次

一、國家的問題…二、問題の根本…三、敵の處在…四、思想戰の實國威…五、國民覺醒の秋…六、バルチザンノ惡害…八、唯物的文明の災禍…八、日本國の天職

一、國家的問題

尼港虐殺事件に就ては既に種々なる評論もありまして、最早や我が國論は一定して居ると存じます。この悲慘なる事件をして十分に意義ある効果を奏しめなければならない、それには外に我が國威を張り、內に民心を正すといふことに、この事柄を活かさなければならぬといふ事は、心ある人の何人も首肯する所であらうと思ふ。或はこの尼港虐殺事件を以て、その責任の何れに在るかといふ事に就て種々論議せられて居りますが、それは政治上の問題としてはどういふ意味を持つか私は存じませぬ、唯だ吾々思想の上に働く者より考へますれば、斯樣な重大な國家問題、對外的大事件を國民相互の間の爭ひに

移すといふことは面白くないと存じます。恰も碁を打つ場合に兩方が白石を持つて相爭つて居たならば、勝敗何れに決するか分らぬ事であります、日本國民六千萬人は、この問題に就ては總て白石でなければならぬ、爾ふ所の黑石といふものは日本國民でないと考へます。白石がその內輪に相爭つて、そうしてこの問題の赴く所が明かならぬといふやうな事であつたならば、それこそ尼港に於て死んだ人の靈は浮ばれぬ事になると思ふのであります。私は斯樣な國家的重大なる問題は、誰に落度があらうが、どういふ事柄から起らうが、總て國民全體が連帶の責任を帶びて之に當らねばならぬものであると考へます。その事柄の起る場合に、小さく論じて行けば部分々々の責任者は如何なる問題にもありませうけれども、國家の大事と相成つたる時に部分の責任を爭うて居るといふが如き事は、愚なる態度であると私は考へます。どうしてもこの問題は左樣な小さい所で爭うと、大きな觀念意識といふものが薄くなる、この重大なる事件をして最も意義あらしめやうとするには、小さき紛爭を打破つて、偉大なる意義に向つて國民一齊にその方向を示さんければならぬものであると信じます。然らば如何なる意味にこれを解釋すべきかと考へきすれば、無論斯かる重大なる事件が起つた時には、これは軍人の責任であるとか政治家の責任であるとか、誰の責任であるとかいふやうな小さい問題ではなくして、總て日本國民全體がこれに責任を帶びて當らなければならぬのである。

二、問題の根本

又斯樣な事柄に就ては、私の考へる所では、「禍ひを轉じて幸ひとする」と日蓮聖人の言はれた通りに、唯だ責任などを爭ふよりは、この問題よりして日本國民に大なる自覺を起さしむるといふことに、その方向を立てなければならぬと思ひます。それはどういふ自覺であるかと申しますれば、抑々今度の問題が何から起つて居るかといふ事の根本を明かにしなければならぬのである。彼れバルチザンなるものは惡逆不逞なるものであるけれども、何も彼が自然に惡逆不逞なる者となつて居るのではない、尼港に於けるこの虐殺事件は、商業上より利益を爭ふ所の利害の衝突より起つた事件でもなく、國家の權利を爭ふ所の國威國權の衝突でもないのである。彼れバルチザンは何等尼港に於て商業をやり、工業をやつて、日本と經濟上の利益を爭ふといふ考を有つて居るものでもない、彼處に露西亞の國威を張つて日本と國權國威を爭ふといふやうな、國家的衝突を意味して居るものでもない。然らば何故に斯の如く日本人を虐殺するかといへば、思想觀念の相違からして日本人を憎むに至つて居るものであると私は考へる。私は極端なる共產主義を執り、最も猛烈なる過激の精神を有つて居る、我が日本は最も嚴正なる國體を擁護して、最も秩序ある文明を造らんとして居る點に於ては、彼れバルチザンと日本とは全く黑白天地の相違ある所のものである、この點が彼が日本人を憎む根本の精神であると私は考へる。即ち斯くの如き事の起るのは國家對國家の問題にもあらず、經濟對經濟の問題にもあらずして、思想對思想の問題が、我が國民七百を虐殺したものであるといふことを忘れてはならぬ。是れは即ち思想の戰ひである、思想は言論だけで戰ふのだと思つて居るのは間違である、思想の違ひが武力に移つてこの虐殺までして居るのであるから、この際に日本人の自覺すべきは、思想の禍ひの恐るべき事は毒蛇猛獸よりも甚しいことを知らなければならぬ。何も露西亞人を憎むこともなければ誰を憎むこともかい、露西亞人と雖も善良なる思想に歸したならば、決して尼港に於て日本人を虐殺などはしないのである、露國と日本との衝突ではない、惡思想に囚はれて居る所のバルチザンと、正義を擁護して居る所の日本人との衝突である。この意味を最も明かにしなければならぬ、普通の場合に起つた國家の利權の衝突だといふ風に考へて居つたならば、これは平凡なる人であると私は斷言します。

三、敵の處在

今回の事件は左樣な思想の衝突といふことに依つて日本人が殺されたのである。若し是が國と國との場合に敵國に殺され

たのであるならば、その敵國を何處までも膺懲せよといふことになるであらう、然らば惡思想の爲に日本人が殺されたならば、全くその惡思想を敵として戰はなければならぬといふ自覺が起らなければなるまい。何が敵であるかといふことが分らないでは、さつぱり弔ひ合戰も出來なければ何も出來ないではないか。

私の知る範圍に於ては、今の露西亞は全く國家といふ觀念を捨てゝ居るものである、それ故にその國内の事情といふものは實にひどい有樣であつて、私が聞く所に依れば、全く社會の秩序は破れて、從來相當な地位を有して居つたとか、或は學問をして居るとかいふやうな身分高かりし人々が、悉く勞働を命ぜられて、今まで勞働をして居つた破落戸であつたやうな者が、鞭を持つてさうして身分高かりし人の尻を叩いて働かして居るのである、併し仕事は幾らも出來ぬから、自分等が食ふものだけも出來ない、殆んど餓えて、甚しきは人の子を取つて食ふに至るといふやうな事になつて居るのである。是れ何の爲に斯の如き事が起るかといへば、全く惡思想の禍ひである、事此に至つて猶且つ思想の恐るべきを自覺せぬやうな國民は、愚鈍なる人と私は斷言する。小さな學說や小さな議論の末をゴチヤ〳〵言つて、丁度へぼ碁が一目二目を爭うて、大きな石が死に居るのを知らないやうに、斯う云ふ理窟だ、あゝ云ふ理窟だといつて居るやうなこつぱ學者などは、今日國を誤るものである。斯の如き明晰なる害毒が起つて居るに拘らず、今猶ほビク〳〵したやうな事を言つて居るとは何事であるか、日本人の公憤はこの過激思想——惡思潮といふものに向つて、怒髮天を衝くが如くに起らんければならぬものである。

四、思想戰の賣國奴

若しも敢に敵國と戰を開く場合に望んで、敵國に欺を通ずる者があつたならば、即ち露探であり、獨探である。惡思想が我が同胞七百を虐殺したる場合に、その惡思想に欺を通ずるが如き曖昧なる者は即ち思想上の露探であり獨探である。斯の如き自覺を國民一齊に起すといふ事が國家に對する所の忠實なる觀念である。政治の末などの小さい事を爭つて誰の責任ちや、彼の責任ちやといつて居るやうな事では、國民はその始末を見て居る間に、この大切なる公憤といふものは消えてしまふ、事は發すべき時に發せしめなかつたならば、その意氣といふものは滅びてしまふものである。この際何もビチヤ〳〵言ふことはない、これは過激思想が日本人を殺したのである、パルチザンが殺したの、軍隊が少なかつたといふやうな下らぬ事を言ふ必要はない、惡虐なる思想が橫溢して露西亞に斯の如き不逞慘忍なる者を造つて、正義の日本人を憎むこと敵國よりも甚しく考へて、斯の如き擧に出たものである。左樣にまでされて居つて猶ほ惡思想を何とも思はぬといふならば、是れ大馬鹿三太郎と謂はなければならぬ。日本人は何處にこの公憤を發するのであるか、國權の爭ひに於て敵國が日本人を虐殺したならば、その敵國に向つて憤慨をしなければならぬが、惡思想が日本人を虐殺したのであるから、惡思想を敵としなければならぬ。この意味に於て吾々六千萬國民が大いに精神的に自覺をして、思想の惡化しつゝある所の日本人、思想の墮落しつゝある所の日本人が墮落より醒め、危險より覺めて、健實なる國民性に戻つた時、眞に七百人の靈を弔ふことが出來るのである。此に覺めない者がこの七百人の同胞の靈を弔ふと言つて見ても、敵か味方か分らぬではないか。露西亞人が斯くの如き慘酷なる方法を以て日本人を殺して來る所のその根本の思想に感染れたやうな者が、この正義の靈を弔ふことは斷じて出來ないものである、私はその點を明かにしたい。

五、國民覺醒の秋

尙ほ私はモウ一つ爰に申したい事がある、總て人生に現はれる事は、如何なる小さい事でもそれには深い意味がある、天意があるといふか、因緣があるといふか、深い實相といふものがあるのである。況やこの七百人の同胞が一人殘らず慘殺された、我國歷史あつて以來曾つて無い所の侮辱を受け、悲慘なる所の虐殺を受けたといふ、この偉大なる事實が、偶然起つて居るものでない、唯だ唯誰々が不注意であつたといふやうな、そんな小さな問題ではない。斯の如き重大なる事のよつて

起る天意の在る所、實相の在る所、何を意味するかといふことに就て、本當に考へなければならぬのである。

これは私色々の事を意味して居ると思ふが、第一に日本人に最後の決心を促す所のものであると考へる。最後の決心とは何であるか、この世界人類の禍ひである所の惡思想、滔々として世界各國が風靡されつゝある所のこの誤れる思想を、日本人が撃滅しなければならぬ所の天職を自覺せよといふ天意である。日蓮をして今日にあらしめたならば、必ず私は左樣な事を申されると思ふ、「天晴れぬれば地明かなり、法華を識る者は世法を得べきか」と叫んだのは、當時の天變地妖、飢饉疫癘、或は蒙古の襲來のやうな大國難を抑へて、この國難の眞の精神を識る者は日蓮あるのみといふことを喝破したものである。今日の日本のこの尼港の事件といひ、その他樣々になる周圍の事情が押寄せて來て居る、この有樣といふものは、最早や日本人が最後の確固なる決心をして起つべき秋が來つて居る事を示して居るのである。何も小さな事をグズ〳〵言うて居る時ではない、最早や事は決して居るのである。その決して居る事を何時までも國民が自覺せんものであるから、そこで「是でもか〳〵」といふやうな譯で、終に七百人殘らず赤ン坊まで虐殺されるやうな事件となつて現はれたのである。汝等日本人よ、今に至つて生ぬるい夢を見、今に至つて生ぬるい個人の自由を叫び、生ぬるい人道の甘い言葉に騙されて過ちを取つてはならぬぞといふこれは大警告である。

今私は此事に就て多くは申しませぬが、露西亞ばかりではありませぬ、露西亞の思想が流れ込んで、既に支那の方にも餘程過激思想が蔓延して居るといふことは事實であります、或は早晩支那も同じやうな運命を辿りはせんかと思はれるやうな有樣であります。亞米利加に於てもその勞働運動は惡化しまして、今までゴンパースといふ人が率ゐて居つた比較的穩健なる勞働組合が勢力を失つて、一方惡化したる過激性を帶びた勞働運動が旺盛になりつゝあるのである。さうして又彼等が民主黨と共和黨の政綱として掲げる所に於ては、斷然日本人を排斥するといのやうな事を、或は加へ、或は加へんとして居る今日の有樣である。周圍の事情を見たならば日本人は大いに覺むべきの時であるけれども、中々覺めない、墮落深きが故に覺めないのである。正當の日本人であつたならば最早や覺むべき時である、それでも覺めないから、そこで如何なる魯鈍なる奴でも、如何なるぼけた奴でも夢を覺ますやうに、骨の底まで徹底するやうに、七百人の日本人が殘らず慘殺されたといふやうな大事件が起つて來たのである、是でも覺めなければ眼の玉を抉り拔かれても未だ眼が覺めぬといふことになつてしまふ。

六、バルチザンの惡虐

今日は最早や何も言ふ事は無い、是等尊き犧牲となれる同胞の靈を慰んで弔ひ、さうして此の事に依つて內には民心を覺醒し、外には國威を張り、最後の人道正義を日本人が背負つて立ち、精神の文明、秩序ある正義の文明は、吾々日本人が率ゐて起つのであるといふ所の決心をしなければならぬのである。今日にして尙ほ生ぬるい事を言つて居つたならば、必ずやこの禍ひは尼港のみには止まらない、破等の惡逆なる謀みは今日の新聞を御覽になつても分るが、到る處にバルチザンなる者は、姙娠して居る女を見たならば、どん〳〵殺しつゝある、又花嫁を捕へて、直ぐ殺して居るのである、それは何であるか、全く惡魔である。女が姙娠して居る時には何處でも「體を大切にせい」といつて、皆がこれを勞はり保護するものである、その一番愛むべき狀態に居る姙娠して居る女を探して歩いて虐殺する、又花嫁として人生の最も華やかなる幸福の境界に置かれて居る者を虐殺するといふ、何事でありますか。思想の禍ひ此に至つては、細かい事同の理窟で彼れ此れ言ふやうな事は何もないではありませぬか。そんな惡逆なる者は、實は世界各國が協力して、亞米利加でも英吉利でも、眞ツ正直の國家であるならば、日本の言ふ通りに之に同意して、彼の惡逆無道なる過激派は一擊の下に膺懲すべきである。何も難かしい事はない、唯だ僅かな懷勘定をして、そんな事をしても今過激派が勢力を得て來居るからどうだらうか、斯うだらうかといふやうな下らない事を考へて居るから決意が附かんのである。高い所の標準の下に、人類の歩むべき正義の標準の下に事

を決したならば、世界が正義の人民である限りは、彼の如き惡逆不逞なる惡魔の如きものは膺懲するのは當然の事である。併し膺懲するからといつて唯だむやみに彼等の首を引抜いて來るのではない、彼等の中の惡逆なる者を膺懲して、以て多數の人民の安寧秩序を保全してやるといふ事である。他國人が殺され居るから見て居ても宜いといふことはない、彼等は同國民と雖も今言ふが如く姦淫して居る女は見つけ次第殺す、花嫁も殺す、その他富豪を虐殺する、實に酷い有樣ではありませぬか。吾々人類の世の中に斯樣な事があらうとは思はなかつた。併しお經には說いてある、人間から敎を除いてしまふと「三惡道增長し阿修羅も亦熾なり」といふ言葉が法華經にある、強い精神の敎化が衰へたる時には、人間でありながら地獄、餓鬼、畜生のやうになり、阿修羅の鬪ひが熾になつて、人間その後にして修羅の巷となり、餓鬼の巷となり、畜生の巷となると言はれたが、露西亞の現狀は全く「三惡道增長し阿修羅も亦熾なり」といふ現狀である。

七、唯物的文明の災禍

さうして事此に至つたといふものは、それは色々思想上の事はあるけれども、大體高き宗敎の信仰であるとか、高遠なる理想といふものを擲つて、唯だ人間がパンに依つてのみ活きる、男女の異性の慾望にのみ幸福があるといふやうに墮落したる文明を造つたが故に、事此に至つたのである。語を換へて言へば唯物主義の禍ひである、唯物的文明の禍ひである。それ故に日本人であつても未だ眼が覺めずして、この高遠なる佛敎の信仰を味ふことが出來ずして、唯だ自分が唯物的の考に居るやうな人間は、一歩を誤ればそれがバルチザンの卵である。であるから今日本人同志に於て覺醒を促すならば、この唯物的の思想――高遠なる宗敎の信仰を嗣り、理想を嗣り、唯だパンに依つてのみ人間幸福が得られる、異性の慾に依つてのみ人間幸福が得られる、異性の慾に依つてのみ人間が活きると考へて居る、この劣等なる文明を覺醒せしめなければならぬのである。それには何も難かしい事はない、兎にも角にも日本に於ては永き歷史を以つて發達したる偉大なる佛敎があるから、誰でも

殺でも先づ一番にこの佛敎に眼覺めて來なければならぬのである、唯だバルチザンが憎い奴だといつても自分がバルチザンの卵であつて見たならば何になるか、能く考へて見なければならぬ、物事は其處が大事である、それを誤つたならば到る處に私はバチルザンといふものが發生するだらうと思ふ。又國家といふものが衰へたならば、尼港ばかりではない、即ち敵が內地に上陸したならば、東京であらうが大阪であらうが、到る處に內地人が尼港でやられた通りの虐殺が、必ずや日本の內地に於て行はれる、さう云ふ事がないといふことは斷言は出來ない、今日の如く國民互に責任を擦くり合ひ、けちな喧嘩をやつて、さうして思想が墮落し惡化して行つたならば、日本の內地にも到る處に尼港と同じやうな、赤兒の末まで叩き殺される時がないとは言へないのである。左樣な事が日本の內地に起らぬやうに氣を附けろといふ警鐘が、即ち尼港の虐殺事件であると考へます。

八、日本國の天職

それ故に石田領事が死に臨んで「此の事は此儘に濟むべきものにあらず」と言つた如くに、大いに露西亞に日本の正義の光を輝かさなければならぬ、內には又「五月二十五日を記念せよ」と呼んだ同胞の最期の聲、この記念といふことは、恐るべき思想の害毒此に至つたといふことを日本人が自覺して、何も逃げて森林に入つて行くバルチザンを追ひかける必要はない、その思想が世界を毒するのであるから、假令露西亞にその思想が起らうが、亞米利加に起らうが、この世界の秩序を破壞して、劣等なる唯物的墮落の文明に陷ゐらんとする人類は、日本人が悉くこれを覺醒せしむべき運動を起さねばならぬのである。所謂日蓮聖人が「日は東より出で、西を照す」――日本の精神文明が世界の光であると言はれた事を吾々は信じて、これは慢心でも何でもない、今の世界の大勢を見たならば、亞米利加にした所がむやみに日本人を排斥するやうな事では、その文明の程度知るべきのみである、その外他の國としても左程に信賴し難いやうな國が多いのであ

るから、日本は自ら任じて起たなければならぬ、人は當てにならぬ、人を頼んで居ればやり損ひが起るから、六千萬國民が人數は少いけれども、一心同體、異體同心となつて、そうしてこの日本の國體を擁護し、日本の精神文明を擁護して、世界の人類を救はなければならぬといふ天職を自覺すべきの秋である。

私は此に於て日蓮聖人が七百年前吾等國民に警告を與へて下さつた立正安國の御趣意に轉た感激する者であります、「天晴れぬれば地明かなり、法華を識る者は世法を得べきか」といふ聖訓は、今日の場合に於ても日蓮主義者が遵奉して、平凡なる議論や平凡なる批評を氣にする必要はない、高き理想の標準を掲げて國民を指導せんければならぬと考へて居るのであります。

（完）

悼尼港同胞之慘死

櫻溪仙史

慘之慘兮悲之悲、舉國決眦齊髮眉、七百同胞死未死、人天俱憤是斯時、噫大正九年五月末、
陛下之赤子忽爲骸、爲骸爲骨不瞑目、血魂飛來訴辰懷、國論勃々沸欲沖、殺氣如潮高極東、
死者赤子生者亦、一氣唯須屠豺熊、彼何者兮破血慘、破血破道將破邦、滔々人面獸心輩、
蹂躪遂將顚法幢、愃起藤公襲蕊巴爾賓、雞林盡爲日本人、犧牲同胞豈徒死　皆是殉國殉道人、
君不見尼港月々如雪、雪中點點血痕紅、紅々碧々如日月、照出東方萬里天

危險思想に對する警戒（二）

本多日生

四、危險主義實現の方法

それから彼がこの主義を宣傳する方法を考へると、それは頗る巧妙なるものであり、又熱心なるものであり、又陰險なるものであり、實に恐るべきものであります。その主義の源する所は、近來の研究に依れば猶太教が基督教の爲めに壓迫せられた時よりの怨靈が籠つて、猶太民族の間にこの破壞思想が胚胎したといふのが世界の公論となつて居る。それが多少の時代を經て佛蘭西の革命となつた、猶太民族は佛蘭西の革命も自分等の革策したことだと廣言して居りますが、或はそれが事實であらう。先には宗教革命となり後には經濟革命を起して居る、その大部分は猶太民族のこの計畫の中から起つて居ると云ふ。國家の戰爭に於てもこの猶太民族の謀計の中に、國家が衝突を起したことも少なからずあると言つて居る。又學術の根本もその目的から作爲して居る、進化學であるとか、政治學であるとか、經濟學であるとか云ふ學說の根本が、洵に變な事を言つて居るやうに思ふが、それは陰謀の學說であると稱して居る。例へば經濟學のマルクスといふやうな人は、猶太民族でもあり、彼等の目的の爲めに一派の學說を作つて、社會を動亂に導いて居るのである。又一方生

理學の方に於て言へば、ダーヴインの進化論の如きも生存競爭を力説して、世の中に戰ひを烈しくして來た、この進化學の學説も、世の中を打破る一つの手段であつたと云ひ、又政治上個人の權利を極端に主張して國權を弱らして來た、このデモクラシー運動も、やはりその陰謀の一つであるといふ風に、色々さういふ事も今日は唱へられて居りますが、中々その謀計は根深い事である。さうして精神の文明を破つて人を唯物的に導いて拜金の思想を煽る、さうすると最後は金を持つて居る者に權力が移る、道德上の人格の權威を無視し、宗教の教權を無視し、國家の法律上の權威を無視し、主權者の權力を無視し、官吏を輕蔑せしめ、富豪を罵らしめ、特權階級を打破して、何も尊敬すべきものはない、道德も宗教も無視して、尊むべきもの、崇むべきものは一切無くしてしまふ、さうして最後に殘る者は金貨をチヤラ〳〵ツと云はす、この金を持つて居る者のみが威張るといふことになる。「ナーニ、そんな者は威張らせぬ」と言つた所が仕方が無い、何しろ腹が減つて來る、食ひたくても錢が無いと云ふ時に、一方でチヤラ〳〵ツとやるのであるから、どうしてもそのチヤラ〳〵ツの音の方に從いて來る、その時金權萬能を以て世界の權力を掌握しやうといふやうな惡業であると言つて居りますが、左樣にして中々大きな手段方法の下にこの主義が宣傳せられつつあります。それは宗教家の中にも這入つて居れば、學者の中にも這入つて居る、政治運動にも這入つて居れば、政府の役人にも這入つて居る、或る大統領などもその仲間であるといふ事を書いて居る、陸軍大臣にしてその陰謀に這入つて居る者もあると言つて居る。又一國の主權者を倒すと云ふやうな事は朝飯前の仕事としてやつて居る。それから多くの場合に大統領選擧などには、その舊惡を捨てて置いて、その者が自分の味方にならなければ、再び立つ事の出來ないやうな打擊を與へるやうに、新聞を買收し政治家を買收してそれを勃發させる、故にその勢力に反抗したならば再び立つ事が出來なくなるから、已むを得ずその言ふ事を肯くと云ふ風にやつて居るといふことである。さういふ手段方法に依つてやつて行くのであるから、その運動は非常に巧妙にして、殆ど觀察しきれない程な範圍に及んで居ることである。政治運動から學説の根本から、宗教運動から、文學運動から、經濟運動から、あらゆる運動の中にその危險主義宣傳の方法を蔓らして居るのである。

先づその中の眼ぼしく現はれるものは何かと言へば、思想運動の上に自由平等博愛の精神を標榜したデモクラシー運動

なるものが、これが危險主義を感染せしむる所の唯一の元凶である。デモクラシーを切離して、善意に解釋すれば、決して惡くない所もあるやうに言ひますけれども、併し全體の傾向としては、このデモクラシー運動の勢ひの及ぶ所、必ずや過激思想を誘致し來ることに、何れの國もなつて居るのである。其處でこの自由といふ事はどう現はれて來るかと言へば、個人の自由を主張するお爲めに、國家の權力を弱めて來る、個人の自由が國家の統率力を弱めて來る。それから平等の主張は財産上の方面を重く視て、さうして貧富の悪隔を打破するといふので、共産主義を造り出す前提となる。自由主義は國家を破壞する前提と爲り、國權を弱らし、平等主義は財産階級を打破する前驅として行はれて居る。斯の如く下拵へがしてあるのであるから、民權自由といふやうな事を極端にやつて行くと、國家の統率權は次第々々に弱くなつて來る。平等をズツと主張して行くと、今日の所謂三國の納税者も別段の階級として之を呪ふやうになるから、これが財産階級を打破する前提である。日本でもデモクラシー運動は同じ徑路を取つて居る。

もう一つは博愛主義、四海同胞主義、人道主義といふ事、これも一往は善い事である。世界の人間を同じやうに可愛がるといふので、これは耶蘇さんなどが盛んに言ふ、彼への足らん佛教坊主も共鳴して騒いで居るけれども、それは實に考慮の足らぬことである。四海同胞とか慈悲平等とか云ふ言葉は何に使ふかと言へば、國家主義を否定する言葉に使ふのである、國家が人道に貢献せんならんと云ふのであるならば、人道主義とは言はぬのである。國家主義に對立して、國家ナンといふものを認めるな、自國他國の區別無く一切平等にやつて行かなければならぬといふ、所謂基督の「人を認めて國民を認めるな」といふ運動である。教育は國民を造り宗教は人類を造ると言つて、國民の區別を認めるな、勞働運動に於ても國家の區域を見るな、勞働階級といふものは世界的だと言つて、國家の統率力を弱める運動に使ふのである。博い親切ナンといふと聞えは宜いけれども、實は博い親切といふ言葉を藉りて、國家の區域を破壞せんとする運動に多く使ふのである。それに騙された人は、「或る程國家ナンといふものは小さい、世界の人間を一時に救ふといふ方が大きい」と思ふ、けれどもそれは騙され人足の云ひ草である、それを宣傳する所の目標は初めから極つて居る、西洋はその主義に依つて殆ど破られたのである、決して西洋は吾々の模範でなくして、寧ろ吾々の爲めに龜鑑となる失敗者である。その最も著し

いものは亞米利加の大統領が獨逸を屈服せしむるに就て、聯合國はデモクラシーの主張に立ち、獨逸は軍國主義に立つて居るのであると言つて騒いだ所が、それが餘り利き過ぎた。デモクラシーの藥が利き過ぎたものであるから、其で亞米利加に於てもデモクラシー運動が盛んになつて來て、遂に埒へきれなくなつた、そこでこの頃はもうデモクラシーは一時取消しだと云ふやうな事になつて、亞米利加に於てはデモクラシーの禍、デモクラシーの失敗、デモクラシーの横暴、デモクラシーの破綻といふやうな事が盛んに言はれて居るのである。寧ろ今日は亞米利加に於ては國家主義を行はんとして居る。それであるから勞働運動に對しては、煽動者取締規則を新たに制定し、その首領には檢束を加へ、二人以上相約して業務を休む者は法律上の處分を加へる。法律を無視する時には、國家の法典を蔑視するの罪を以て重き刑罰に處すると言うて、その法律を侮蔑するやうな者、或は相約して同盟罷工をやるやうな者、或はその煽動者といふやうな者は、最も極刑に處する方針に依つて亞米利加は漸く安寧を維持して居るのである。それは新聞の報ずる所に依つても、又亞米利加を視察して歸つた人の穩々なる報告に徴しても明かな事である。今この際の取つて居る態度は、デモクラシーが利き過ぎて弱つて居るといふのである。だから人道主義、デモクラシーなどと云ふ事を亞米利加の大統領が言ひ居つたが、二年經たぬ今日に於て既に手を焼いて居るので、彼をして眞に告白せしめたならば、吾輩の言ふのと同じ事を言ふに違ひない。唯だ今日は大統領を尊敬し過ぎて居るから分らんのぢやけれども、本當は頭を抱へて「イヤ君の言ふ通り、どうも弱つた」と言ふに違ひない。又彼は「さうぢや無い」と言つて負惜みを言ふかも知らんけれども、それは彼に聞かなくても分つて居る、彼は確かに道り損なつた。デモクラシー運動は左樣にして世界に大なる禍ひを爲して居るのである。

この事は過激派の或る者をして言はしむれば、斯樣な事を申して居ります。

吾々が自由、平等、四海同胞の言葉を放ちしは既に古代の事なり、それより以來無意識の鸚鵡どもは、眞の個人の自由を破壞する事を知らずして、その言葉を唱和せり。

デモクラシーは自由と言ひながら、却つて眞の自由を破壞するものである。何故かと言へばデモクラシー運動は平等を主張するが故に、眞の自由ではない、平等を主張する事になると、即ち絶對の權利を要求して來るのである。平等といふことは十の物を十人が一箇づつ分けるといふのでは無い、十の物を十人が各々全部を專有する權利を言ふのである。此處に十箇の饅頭が出た、十人で一つ宛取らうと言へば、權利を拘束される事になる。各人が十箇づつ取る權利があると言つて、十人が一時に十箇宛取らうとする、其處で強い者勝ちといふ事になる、平等論を主張する者は即ち强者の社會である。その證據は露西亞を見て御覽なさい、平等を主張した結果泥棒ばかりになつて居る、正業に就く者は減じた、平等と言ひながら「貴樣うまい物を持つて居るな、遣こせ」と言つて引ッ奪くる、よこさないと言へば殴りつける、それでも反抗すれば突き殺すといふのであるから、何が一番强いかと言へば即ち暴力である。故に自由平等を想ね廻はす者は、決して其處に幸福があるべきものではない。眞に個人の自由を尊重するならば、決して平等とは言へない、好く働いた者が錢を溜める、ノラクラして遣つた奴は貧乏をして首をつらんならぬと云ふのは、それが即ち眞の自由である。勝手にノラクラして首を吊る、働いて錢を溜める、それが自由である。然るに働いた者の利益を遊んで居つた奴が來て「遣せ、財産平均ぢや」といふ、然らば何日目に平均するのを以て至當とするか、一箇月溜めさして置いて行つては平均するか、或は半年溜めさして置いて平均するか。それは人の權利を要求するといふ事になる、それをデモクラ、ヘモクラ言へば宜いと思ふ人達は、過激派に嘲けられて「無意識の鸚鵡」と綽名されて居るぢやないか。確かに鸚鵡である、左樣にして眞に人間の幸福が何處に得られた實例があるか、「得られる、得られる」と云つて嘘ばかり吐く、鸚鵡といふ鳥は人が來て「得られる」と言へばその眞似をして「得られる」と云ふだけの話で、得られた實例はありはせぬ。

さうして彼等は之を自由平等の運動と上て、民衆を煽動して所謂群衆騒動を起すのである。その一番熱を持ち易いのは、利益の觀念に導く勞働運動である。もう一つは富豪を打倒せといふ目的に於ての政治運動、即ち普通選擧に於ける政治運動とか、或は事業國有論といつて、鐵道とか鑛山の國有を主張して、その利益を勞働者が奪らうといふ利益を目標に置いての國有運動、それから選擧權の擴張に依つて自分が勝手な決議が出來るといふ事、それは利益を伴うて其處に熱を煽るのである。丁度眼の前に魚を置いて犬を咬かけるやうに、「食ひたい、食ひたい」と思うて居る奴を煽動するのであるから、忽ちワン〳〵呻つて飛込んで行くのである。他の運動は眼にもつかないで、驀らに突進して行く、さうしてその手

段方法はどういふ工合になつて居るかと言へば、

生活難より生ずる嫉妬、憎惡の念を利用して、吾人は群衆を動かし、その手を藉りて吾人の道を妨ぐる者を悉く撲滅すべきである。

これは簡單であるけれども、能く玆に彼等の覺悟が分つて居る、又過激派の秘訣といふものが分つて居る、生活難より生ずる嫉妬、憎惡、即ち暮しが困難であるとか、物價が騰貴して困るといふので苦んで居る者が、自働車に乘つて居る奴が羨ましい、御馳走を喰つて酒を飲む者が忌々しい、石を打つけてやらうといふやうに、生活に苦しむ爲めに富者を呪ひ、又他の行爲を憎むと云ふ、この嫉妬憎惡の念を利用するのである。勞働運動の勃發し易いのは其處にある、其處を騙てるから直ぐに火が附いて來る。さうしてその群衆の暴力を藉りて、過激思想を實現する途に横はつて居る邪魔物を打ち碎くのである道德宗教政治富豪社會の習慣制度、何であらうとも悉くこのボルシェヴィズムの妨害を爲す者を、群衆の暴力を藉りて粉碎する、斯ういふのである。これは何人でも役に立つのである、群衆の暴動は非常に恐ろしいもので、宗教であらうが、道德であらうが、國家であらうが、何であらうが粉碎し終るのである。さうしてその暴力を振ふ勢ひといふものは、彼等が得意として述べて居りますが、即ち群衆の蠻威、民衆の暴力は實に恐るべきものである。

群衆は蠻威を發揮し、群衆の求むる自由を與ふる時は、直ちに無秩序の社會と轉化す。

彼の言ふ通りにして行けば、直ぐ社會は混亂の社會になる、例へば今日交通勞働者が計畫して居る勞働運動を思ふが僅にやらしたならば、直ぐに電車の運轉を止めてしまふ、それを援助する者は電燈會社を破壞して眞ツ暗にしてしまふ、瓦斯會社をも破壞する。それを援助する危險思想の奴が其處等に火を付ける、第一に三越とか帝劇といふやうな所を焼き拂はうとする。斯うなれば東京は直ぐ暗黑の世界と成り、食物が無くなつてしまつて、全く修羅の巷と變る。それは一時間と經たぬ、今此處に斯うして吾々が講演をやつて居つても、交通を斷たれ、電燈を消され、さうして何處かに二三箇所火を付けやうものならば、實に不安の狀態に變るのである、それを彼等はやるのである。さうしてこの群衆といふものは、實に恐るべきもので、血を見なければ熄まない。

群衆の求むる自由は、決して自己の壓迫を免れたといふ事に依つて滿足するものでない、復讐の觀念となり、從來權力を得て居り多少の階級を有して居つた者を襲うそして、その血を飲んでそれに滿足する時點るのである。その從來の特權階級の血を飲まさんければ、群衆の暴威は熄まない、飽く迄も猛り狂ふものである。斯の如き群衆なる者が神聖なるものと言へるか、否、恐るべき惡魔である。群衆といふものは之れを善導すれば國家を經營する所の要素であるが、これが暴動化した時には、國家を破壞する所のボルシェヴィズムの先棒として、彼等の惡思想を宣傳する第一の力となるものである。故に昔から「群衆は水の如し、水よく船を浮かべ、又よく船を覆へす」と言はれて居る、國家を浮かべて居るものは群衆であるけれども、國家を覆へすもの又これ群衆である。而して近來起るのは、水が船を浮べる方でなくして、波風荒くして遂に船を沈沒せしむる方が多く現はれて來て居るのである、それが現代世界の狀態である。

左樣にしてこの過激派の運動方法は、先づ勞働者を使嗾し煽動することが、どうしても順序として現はれて來る。その先棒となる者は青年の學生である、これは思想未だ定まらずして漫りに彼のデモクラシー運動として騷ぐ、その後とに勞働運動が起る、丁度さういふ順序に現はれて行くのである。一面には哲學上の思想として唯物論を主張して、神や佛を罵らせる。これは日本に於てもやはり幸德秋水等が『無神無靈魂論』を書き、『基督撲滅論』を書き、彼等の『に依つて空んに宗教を罵つて居る。今日の勞働運動に熱中して居る人は、やはり宗教などは何になるかと言つて、唯物的傾向を宣傳して居る。それから新らしい〳〵といふ事を流行らす、これが曲者ナンである、昔から道德上の觀念に於て、新らしいといふ言葉を使つた者はない、必ずや「先王の道を行うて過つ者は無い」とか、「古今に通じて謬らず」とか「皇祖皇宗の遺訓にして子孫臣民の遵守すべき所」とか、或は「三世一貫の大道」とか「萬世易らぬ」とか云ふことが、道德として尊重の言葉であつた。所が今は新らしい道德といふ事を言はなければ、善いやうに考へなくなつたのは、これ亦ボルシェヴィズム宣傳の方策に乘つて居るのである、無論道德に於て新らしく變る所もあるけれども、それは大道として萬世易らぬものと、用道として時と所に應じて變るものとは、古來から道德の觀察方法に於て定まつた問題である、徒らに新らしい道德といふやうな事を言つて、萬世不磨の大道を轉ずるといふことはいかん。碁なら碁にして見たならば、それは一局面々々毎に新らしい碁を打つといふけれども、碁の法則は極つて居る。碁盤の目も極つて居る、萬世變らぬ所の大法則の下に新らしい碁が打てゝ行くのである。然るに碁盤を一遍々々線を

引き直すとか、又その勝敗の法則を變へてしまつて、目が無くなつたやつが一番勝ちだ、目などを拵へた奴は負けだと云ふ、丁度さういふやうなことを言つて新たらしき道徳などと云ふ、だから適從する所を知らない。何がそれなら一番宜いのぢや、新らしい道徳といふものは何かと云ふと、デモクラシーは人格尊重とか云つて、人格を尊重することを要求して居るのである。併ながら今日の主張は、他人を尊敬すると云ふのではない、自己を尊敬せよと要求するのである。皆が要求するのみで、自分から盡さうとはしない、「貴樣、他を敬へ」「何クソ、貴樣こそ他を敬へ」……敬へ敬へと言つて兩方で言ひ合ふので、恰も乞食が皆な「呉れ呉れ」と言つて手を出すやうなもので、誰も道らうといふ者は無い、勞働者を尊敬せよといふ、然らば勞働者がその事業の經營者に對して尊敬をするか、それはしない、「そんな事は屈從道徳だからしない、そんな舊い道徳はいかぬ、」そうして「吾々を尊敬せよ」と言ふ、そういふ不合理な事を言ふのである。であるから新らしき道徳などと云ふものは、根據も無ければ、實行も出來ない所の事を言つて居るのである。西洋でそれが能く行はれて居るかと言へば、些つとも行はれて居らぬ、腹にみな一物があつて、そうして種々なる隱蔽の間に變態を起し、怨恨を結んで、即ち勞働者と資本家の間も益々恨みを高めて來て居るのである、殆ど犬と猿のやうな狀態になつて來て居る。又民衆相互の間に於ても、今日共濟の精神が高まつて居るのではない、益々險險なる方法を以て　商賣人にも、或は物價調節を行ひ、或は法律を以て奸商を取締らんければ、世界の何れの國に於ても適當なる商賣が出來ない、暴利取締令といふものを皆な行ふやうになつた。これは社會が破壞されて來た證據である。商賣するにしても、それ〴〵不都合な者は牢にぶち込むと言つて利益を檢査しなければならぬやうな事になつたのは、相互の間に道徳觀念が破れた證據である。斯くして色々な手段を講じて、この主義の宣傳をやつて居るのである。

更に之を小說文學の中に這入つて行つてやるので、その場合には載文學を力說する。人間が淫靡な精神に傾けば、高傑なる思想が無くなる、國家を愛する爲めに命を捨てると云ふよりも、女房と酒もつて寢て居る方が宜いといふ事になるから、新田義眞のやうな人でも、勾當の內侍の爲めに進退を誤つたやうなもので、男女の關係といふものは、洵に恐るべき勢力を有つて居るものである、それを煽る。滔々として今日の日本の青年が、左樣な自然主義的文學に陷るのは、これ亦危險思想宣傳の一手段として行うて居ることで、皆なその手に乘つて居るのである。又宗教運動でも、彼の自由主義の宗教は、「宗教運動の社會化」とか稱して、基督教が執つて居る態度の如き、「自由解釋」と稱して色〻教樣に反對し、高等批評」と稱して聖書を批評し、成るべく聖書に對する信念を失はしめ、宗教の教義をドグマと叫んで之れを嘲けり、そうして自由解釋をやつて、自分〴〵の勝手な解釋を主張するから、神は內在的のものにして、外には無い、神在りと思ふも自分である、無しと思ふも自分であるといふやうにして、信仰をヘナ〳〵にしてしまふ。それを始めは氣が利いたやうに思ふけれども、終ひには食ひ荒らして突つき散らかしてしまふ。さうして結局何も無くしてしまつて、終ひには「分らぬ〳〵」と云ふことになつて、そんな分らん宗教は無い方が宜い、そんな分らん所に引つ懸つて居るより、宗教運動は貧乏人を救ふとか、或は勞働運動の方に這入つて同盟罷工を煽動するといふのが、神聖なる進歩せる宗教の社會運動であるといつて、その宣傳費用として三百萬圓送るといふやうになつて來るのであるから、名は宗教運動であるけれども、實は全くボルシヱヴィズムの宣傳の先驅を爲すものである。

斯の如く或は宗教の衣を着て危險思想を宣傳し、文學の衣を着て宣傳し、勞働運動の衣に依つて宣傳し、政治運動の名に依つて宣傳し、人道主義の美名に隱れて宣傳し、學理の影に匿れて科學思想に依つて宣傳し、或は社會構成の原理ナンど云ふ言葉に依つて宣傳し、種々な事をいふけれども、皆な曲者である。その根本を探れば同一の穴の狸から出て來て居る、その正體を觀破して現代の文明を評論する資格は波等西洋人には無い、西洋の文明は吾〻の模範になるべきものではない、探る可き所があつても、それは末の事であつて、根本觀念と云ふものは總べて破れて居る。又大觀すれば宗教運動としても破れて居る、自由主義の宗教を主張して、遂には宗教の信仰を打破してしまつて居る。宗教の名はあつても、その運動は非常に險惡なる方面に奔せて居る。故に之れを日本に於ける亞米利加なら亞米利加の態度に調べて御覽なさい、彼が宗教の衣を着て如何なる働きをして居るかと云ふ事は、十分研究すれば、全くその方向を誤つて居る事が分るのである、それが分らぬのは不明である、その位の事が觀破し得られない者は、眞乎たる日本人では無いと私は考へる。

左樣にして彼等の主義宣傳の方法は多方面であり、頗る根蔕深きものであり、又これに非常なる熱心を持つて居るものであります。（未完）

思想善導に關する所見

海軍中將　佐藤鐵太郎

この頃の世界の狀勢、今日自治會で最も努めて居ります所の勞働者の善導といふやうなことに就て考へて見ましても、若しも勞働者と資本家――といふと大變をかしいですが、兩方とも勞働者でありませうが。兎に角先づ資本を出す者と、筋肉を以つて勞働して仕事をして居る者の間に溫かさがありましたならば、サボタージュもストライキも起きる筈がありませぬ。（拍手）それを唯だ冷たく、金持は「俺は金を出して居るから、お前方は自分の命令に服從して朝から晩まで働くべき義務がある、吾々はお前方をして義務を完うせしむべき權利を有つて居る」……鼻の先きにさういふ事をブラ下げて居るから、それで筋肉勞働者が承知せぬのであります。（拍手）筋肉勞働者もさうであります、「資本家は吾々働いて居る者をして安全なる生活を得せしめ、うまい物を食ひ、立派な着物を着せるだけの報酬を與すべき義務がある、吾々はこれを要求する權利を有つて居る」といふやうな風にやつて居りましたならば、朝から晩までストライキ詰め、サボタージュ詰めであります。（拍手）斯の如き狀況では、如何なる人が出ても人類の幸福を進めることは出來ませぬ。我が日本國民は祖先から今日まで、悲慈と報恩の教育方針を以て育てられて來た所の國民である、日本以外の國は遺憾ながら權利義務の思想を本として育てられて來た國に近いのであります。吾々日本國民にあらずして、どうして世界の人類を救うて溫かい境遇に導くことが出來ませうか。忠孝などと言ひますと、この頃の若い人は舊い思想だといひます、吾々が忠義とか孝行といいうと、「又舊い事を言つて居る」と言ひます、如何にも舊い思想であります、三千年前から今日までズッとある舊い思想であります。但し千萬年億萬年經つても尊さの變らない所の思想であります。（拍手）今の若い人は失聽ながら動もすると權利かぶれなどしまして、ナーニ親が子を可愛がるのは本能的の要求であるとか、欲望であるとかいふやうな理窟を附けて、何でもないやうな事に考へて居る人もあるさうでありますが、親の恩を知らない者は要するに犬畜生であります。（拍手）

これを推攘めて見たらどうでありませうか、例へば資本家が、今日斯の如く自分の事業が榮えて參りますのは、偏に皆が働いて呉れるからである、皆の働いて呉れるといふことを考へて見ると洵に孝けないといつて、そこに恩を感じ、又使はれて居る勞働者も、外の所に行けば一圓五十錢呉れるけれども、自分の主人は一圓しか呉れない、如何にも吝ん坊であるが、併しこの人が自分を雇つて呉れなければ、今日自分の親に對して魚を食はすことも出來ない、不平のやうではあるけれども、今日の吾々の生活は自分を使つて呉れる人の恩義である、その人が無ければ直ぐ路頭に迷ふのである、濟まぬことながら恩は恩である、洵に有難いといふやうな感じを起すことが出來たとするならば立派なものでありますけれども、唯だ一圓と一圓五十錢といふ錢の關係ばかりに眼玉を大きくして騒ぎ廻つて居るならば、やはり恩を忘れた所の、蟲利義務思想ばかりに囚はれた所の、犬畜生――といつたら怒るかも知れませぬけれども、若干尻尾の生へさうな心持が致します。（笑）恩といふものを感じて滿足すれば、不滿足も滿足になります、けれども强て不滿足なるものを滿足させようといふのは無理である、私はさういふことを言ふのではありませぬ。お互に恩を感じ合ふといふ心が深ければ、少々の事はお互に許し合つて、そこに溫かい關係が出て來るものだといふのであります。

吾々はこの溫かい世界を形造る爲めに努力しなければならぬ所の國民であると申しましたが、併ながら今日はどうでありませう。祖先以來溫かい世間を形造る爲めに適當な性格を備へて居つたとは申しながら、今日のやうな事が果して世界の國民に教へてかゝることが出來ませうか。今日は姑く措き、我が國民は果して世界の師匠となつて立つだけの資格があるでありませうか、これが無ければやはり空論であります。私が斯ういふ事を申すと諸君は又佐藤が妙なことを言ふと仰せられませうが、日本は今日まで未だ曾て一遍も外國人に對してお師匠樣になつた事がない國民であります、何時でも外國から教はつて居る、何時までもお弟子であります、誠に頭の上らぬやうな心持がします、何時でもお師匠樣に頭の上らぬやうに教へられて居る國民が、世界の各國民に對して教へて掛らうナンぞとは、誠に烏滸の次第であると考へるのが至當でありませう、けれども私はさう思ひませぬ。一寸譬へて

申して見ますならば、小學校を卒業したばかりで直ぐ人のお師匠樣になるやうな者は、碌な者ではありませぬ、中學校を卒業してお師匠樣になつても、碌なお師匠樣にはなれませぬ、大學校を卒業しても尙ほ足らぬ、研究に研究を積んで、最早や人から聞くことは無くなつた、自分の研究は幾らもあるけれども、人から聞くことは無くなつたといふ所まで進みまして、それから師匠になる者が本當の師匠でありませう。（拍手）何でも早く滿足して師匠になるのは碌な師匠でないといふことが明かであつたならば、日本はどうでありませう、日本國民は一番先には朝鮮から教はつた國であります、その頃には非常に朝鮮かぶれを致しました、その次には支那から教はつた國民であります、その時代も非常なハイカラであつたのであります、天智天皇時代のことを考へて見ますと、總ての者が支那風である、若し今日より十年程前のやうな支那の樣子が續きましたならば、日本人は脊中に妙なものをブラ下げたでありませう、今日の西洋文明に模倣するよりも更に一層深く支那の文化に心醉したのであります、佛教が參りまして最も燦んな時代、桓武天皇時代に於きましては、畏れなおら　天皇陛下を以てすらも「三寶奴」と稱せられて、佛法僧三寶の奴とまで傾せられたやうに、印度文明に傾倒したのであります、非常にハイカラがるのは日本人の特性と見えます、けれども何事に依らず本當にその事に汲頭して――首まで這入らなければ本當の味ひが分るものではありませぬ。（拍手）日本人は宜い加減の學問をすることは嫌ひであります、何處までも深くどん底まで究めなければ已まぬ國民であります。それでありますから支那の文明が這入りますと、それを日本化するのみならず、支那の文明の本當の眞髓を日本に持來したのであります、孔子樣の道は支那には遺つて居らないでありませう、遺つては居るか知りませぬが、日本の儒教といふものは立派なものであります、儒教の精神は日本に依つて傳へられて居ることは疑ひもないことであります、日本人が皆孔子の教を知つて居る譯ではありませぬけれども、日本民族として考へて見ますと、支那の文明を最も宜く消化したものは日本人であります。佛教もさうであります、佛教に伴うて參つた所の印度文明もやはりその通りであります、今の印度には殆ど佛教がありませぬ、佛教は日本に依つて存在を認められて居るのみであります。斯の如く日本人は凡ての文化を能く嚙み分けて能く之れを消化し、立派なものに仕上げるといふ力を持つて居ります、今は終に西洋の文明を吸收しつゝあるのであります、やがて西洋文明を醇化しまして、本當の眞髓を日本で發揮するやうになつたならば、東西文明の融合といふことは茲に至つて初めて成るのでありますが（拍手）その時、日本は世界の師匠となるでありませう。即ち日本人の「神代以來傳へた所の悲慈報恩の考」を土臺と致しまして、この悲慈報恩の土臺の上に、西洋の權利義務の思想を繁茂せしむる、悲慈報恩の土臺は益ゝ肥やして、この非常に肥えた畑の上に權利義務の思想を美しく繁茂させた所の樣子を示して、これを西洋の人に示すのは日本人の天職であります。（拍手）

斯ういふ事に考へを及ぼして見ましたならば、日本人は今日から餘程一層を締めて掛からなければならぬ、今日は詰らぬ目前の事にゴタ〳〵して居る時ではない、自から大いに修養して立派な品性を養づて、世界の師匠として働かなければならぬ。吾々の祖先は三千年の昔に我國を打樹てられて、今日までこの立派な國を傳へて下さつた、この恩に報ずると同時に、世界の人類から吾々が受けた所の是までの御恩を報ずる爲めに、世界の人類に最も適かい所の方面を教へてやるといふことを覺悟しなければなるまいと思ひます。（拍手）この覺悟にして成つたならば目前の詰らぬ事の如きはまるで問題にする價値もないといふやうな、高尙な考へが起きるだらうと思ひます。（拍手）

佐藤が又空なことを言ふとお考へでありませうが、私はさうは思ひませぬ、空想のやうなことで決して空想でありませぬ、腹の中に立派な心がありますと、目前に出て來る色々の事に就ても、立派な判斷が出て來るものであります。それは皆樣も御承知のことでありませう、物は考へやうであります、例へば悲慈といふものは如何なるものであるか、慈悲報恩と申しますその慈悲といふものは如何なるものであるか、慈悲といふものは非常な勇氣を持來すものであります、慈悲の念が深ければ非常に強い勇氣が出て參ります。母親が自分の子供が水に溺れた所を見ましたならば、泳ぎを知らない人でも、自分の命などは顧みる遑なくして子供を救はんが爲めに飛込むでありませう、これが親の慈悲であります、慈悲の爲めに自分の身を顧みぬといふ大なる勇氣が出て來るのであります。この慈悲といふものが世界の人類を幸福に導く所の第一原因であるから、この點を日本人は餘程能く考へて掛からなければならぬ、さうしてこの考へを土臺として、何事に向つても有難い〳〵といふ觀念を失はないやうにしなければならぬ。今申した通り物は考へやうであります。

お笑ひ草に一寸申上げて見ますが、私はこの頃東京で出動

致します時は、皆さんの如く電車に乘ります、さうすると東京の電車は人が非常に込合ひまして、殆ど命懸けであります、吊革にブラ下つて押されてユラ〳〵しながら居るのであります、この間相變らずブラ下つて居りました所が、後から押されてヨロ〳〵として、前の人の足を踏みました、さうしたら前の人が「バカツ、氣を付けろツ」と怒鳴りました、(笑)私は情けないと思ひました、けれども私が惡いのでありましたから、「恐入りました」と直ぐ返事を致しました、さうしたらその人は後をちよいと見て、「あツこれは……」と言ひました、私はそれで滿足致しました、再び顧みて「氣を付けろツ」と怒鳴られたら、私も默することは出來ませぬけれども、向ふも言過ぎたと思つて「あゝこれは」と言つて挨拶しましたから、それで濟みました。併し斯ういふやうな境遇といふものはどうでありませうか、生意氣を言ふのではありませぬが、吾々も相當な身分の者であります、諸君の前で自分の事を言ふのもをかしいですけれども、自分は海軍の中將である、海軍の中將位になつたならば、こんな事をしてブラ下つて歩かんでも宜ささうなものぢや、(笑、拍手)成金のやうに自動車に乘ることは出來ぬにしても、(笑)切めては吊革にブラ下ること位はしなくても宜ささうなものだといふ、卑しい考を起すこともないではありませぬ。けれども物は考へやうであります、私は生れは北國の詰らぬ大小差しただけの者であります、一生懸强しましても五十石か百石の侍にしかなれませぬ、殿樣の前に出ますと、頭を下げて、一言もない、攝政關白樣などから言ひましたならば、テンで虫けら同樣に取扱はれる、(笑)一生懸强しても千石の御家老などは逆も望まれない者であります。所がこの頃はどうであるか、明治大正の時代に生れ合せたが爲めに、不肖ながら若し國家に一朝事があつたならば、一方を受持つて華々しき戰を遂げやうといふ身分になり得たのである、(拍手)攝政關白と言はれた一條とか九條とかいふ人とも、友達のやうな言葉を代すことが出來るやうになつたのである。有難いことには　天皇陛下の御前に於て、直接に御奉答も出來るやうな身分になつたのである。(拍手喝采)サウ考へて見ますると現在のこの世の中は有難くて堪りませぬ。(拍手)諸君、物は考へやうではないですか、嫌だと思ふと何處までも嫌になる、不平だと思へば何までも不平になる、有難いと思へば、考の置き方に依つては有難くなるものであります。

私は官て一人の子供を喪ひました、私のこの上もなく愛して居つた所の子供を喪ひました、その時に私の友人が私の家に訪ねて參りまして、後に或る人に話したといふことをその人から聞きましたが、「佐藤の家に行つて見た所が、死んだ子供のある家に行つたやうぢやなかつた、あの時やはり外に子供を喪くした友達があつて訪ねて行つた所が、そこの主人が言ふには、自分は子供が可愛くて堪らなかつた、この子供があるが故に自分があるやうに思つて居つた、所が今喪くなつてしまつた、洵に情けない、殘念だと言つて居つた、所が佐藤の家に行つたら斯う言つて居つた、死んだ者は仕方がない、唯自分はこの子供を不孝の子にしたくない、この子供が死んだが爲めに悲しんで頭を痛めて、場合に依つて御奉公も充分出來ぬやうなことになつたならば、この子供は親を悲しませる不孝者になるのである、私はこの子供を不孝者にしたくないから、この子供の代りまでも是から他は勉强してドン〳〵やる、この子供を犬死させないのは私の勵み方にある、少しも悲觀的な考へを持たないから安心して呉れといふことを、私が友人に言つたさうであります。(拍手)私の友人はそれを聞いて非常に感心したと言つて居つたさうであります、何だか自慢をするやうなお話でありますけれども、物はやはり考へやうであります、子供が喪くなつた、殘念だ、淋しいと考へますと段々さうなりますけれども、この子供は今死んだ、併しそれが爲めに我が病氣にでもなるとか、或は自分の志を忘つたりするとかいふことになつたならば、この子供が不孝の子になるぢやないか、(拍手)この子供を孝行な子にする爲めには、この子供が若し生きて居つたならばお役に立つだらう、色々斯ういふ事もやつたらうと思ふことを、子供に代つて自分がやりさへすれば、即ち子供が死んだといふことは自分に大なる勵みを與へる、又子供の死は犬死でなくして、親に對して大なる功德を積んで死んだと同じことである、即ち孝行な子供となるぢやないか。(拍手)斯ういふ工合に考へて見ますならば、私は世の中の悲しみも苦しみも同じく是れ有難いと思ふ、苦しみも有難い樂みも有難いといふことになる、「自慶安住」の意味は私はその邊にあるだらうと思ひます。

日本人はこれから後先刻申上げましたやうな責格あることを自覺致しまして、さうして物は考へやうでありますから、何時でも善い方に考へて、何時でも立派な考へを自分のあたまに浮べまして、これを以て自慶安住の意味を完うして、世界の人類に教へて掛らなければなるまいと思ひます。大變に大風呂敷を擴げたやうでありますが、私の申す事は大體これで盡きたのであります、是から後にいろ〳〵有益なお話がある筈でありますから、私はこれで御免蒙ります。

佛教信仰の正統

本多日生

第八　二世を貫く信仰

佛教の信仰に關して一般の批評は、厭世的である、悲觀的である、未來的であるといふやうなことを申しましたが、それは全く佛教の或る一宗派の考へる所を以て觀察をしたのであつて、部分を觀て全體を判斷した、明白なる論理上の誤謬であります。我國の宗旨の中には厭世悲觀のやうに見える宗旨があります、けれども、それは全く佛教の本旨に違反して居るものであります。この間違つて居るものを捉へてそれが佛教の全體だと觀察するのは、是れ亦批評を誤つて居るものである。大體德川時代の儒者が佛教を攻擊しました目標は、淨土宗と禪宗であります。今日の教育者などが佛教ぎらひの頭になつて居るのも、やはりその德川時代の儒者が言つた批評をその儘受けついで來て居るので、自分みづから佛教を研究して下した所の批評ではないのである。唯だ因襲的に佛教は厭世的である、獨善的であるといふやうなことを言つたのでありますが、その厭世的といふ批評は淨土宗或は眞宗に對する批評であり、獨善的といふ批評は禪宗などに對して起つたことでありませうが、これは何れもその宗派に左樣な傾きがありますけれども、それは彼等が佛教の應用を誤つて居るのであつて、佛教とは淨土宗でも禪宗でもない、佛教は釋迦牟尼の立てた大經典が今日尙ほ現存して居る、故に厭世的等の言は佛教を批評する主意でなくして、淨土宗を批評し、禪宗を批評する言葉として見るならば、或はその批評が通るかも知れんけれども、佛教が厭世教である、獨善主義であるといふやうなことをいふのは、その人が佛教を調べないで、唯だ俗間に居る所の坊さんが寄い姿あを集めて、この世は夢ぢや、阿彌陀さんの所に行けといふやうなことばかり言ふて居るのを聞いて、ハヽア是は厭世的ぢやなと速斷した、極く粗末な觀察である、或は禪宗が世の中は是非ともに意に介するに足らぬ、本來無一物ぢやといふやうなことを言つて、さうして山の中に這入つて眞如の月を觀ずるといふやうな事をするのを見、或は達磨が九年の面壁に向つて默つて居つたのを見て、こいつは獨善的である、國家が如何に衰へやうが、社會が亡れやうが、左樣なことは構はないで、唯だ自分ばかり行ひすまさうとするのであるから、斯の如き個人的獨善的の宗教はいかぬといふことを言つたのである。それはさういふやうな傾きがその宗派にあつたのは事實でもあり、その批評がさういふ意味に於てならば當らぬ譯でもないが、それはもと〳〵佛教を間違へて掛つて居るもので、即ち日蓮聖人などから早く攻擊されて居るのである、その點に於て日蓮聖人が禪宗を攻擊し、淨土宗を攻擊したその議論は、德川時代の儒者などの言ふやうな淺薄な皮相な觀察でなくして、最も深刻に徹底的に觀察されて居るのであるから、さういふ書物を讀んで「ハヽア是は日蓮の議論が宜しい」と言ふならば少し學者らしいとも云へるけれども、それを少しも見ないで、自分だけで佛教は厭世教ぢやといふやうなことを言ふのは、全くその者の無學の致す所である。その無學の批評を今日受ついで居る者はやはり無學である。この反駁が間違ふことは斷じて無い、その證據となるべき偉大なる佛陀の經典は今尙ほ大藏經として現存して居る、初め阿含の經典より終り法華涅槃に至るまで、一代を通じての佛教の本領は、二世貫串の大教である、決して厭世的のものではない、悲觀的のものでもない。世上に小乘は最も厭世悲觀と言はれて居る、その小乘教すらも決して左樣なものでないといふことは、私一々これから證明したいと思ひますが、それは實に教學に違あらざる所のものであります。

そこで先づ法華經が大事なことはみな纏めて教へて居るのであるから、一代に亘つて釋迦が說いた所の一番良い括りといふものは法華經にある、であるから佛教の信仰が厭世的であるか、悲觀的であるかといふやうな問題は、先づ法華經を見てその當否を決定して掛らなければならぬ。法華經は明白に藥草喩品に如來が世に出現せられた目的を示されて居る。そこには

安穩の樂、世間の樂、涅槃の樂を得せしめんが爲の故に
如來は世に出現せり。

といふことが說いてある。釋迦如來が世に御生れになつた目的は何處にあるかといふと、唯今申す安穩の樂、世間の樂、涅槃の樂、この三方面から人々を救はうといふのである。安穩の樂といふのは、如何なる境遇に居る者でも精神の滿足、

平和を得せしめやうとするのであります、彩の方に於て幸福のやうに見えても、精神の内部が悶へて居つては何にもならぬ、あの人は大變仕合せだと外部の人が見て羨れた所が、本人自身がさつぱり幸福でないと感じて居つたならば、何の幸福にもならぬものである。「あの女は大變な富豪に嫁に行つて、毎日自動車に乘つて芝居ばかり見て居る、非常に仕合せな人だ」と斯う外部から見ても、その人は成程さういふやうな所は幸福のやうに見えるけれども、家庭は治まらない、亭主は誠に人格の無い人間でさつぱり面白くない、こんな人と一生暮す位ならば、イツソ首吊つて死なうか知らんといふ風に思つて苦んで居る人も世の中には澤山ある。男の方から言つてもその通りで、事業は發達するけれども、飛んだ者と夫婦になつた、今更ら叩き出す譯にも行かず、子供も出來たし、此女を追ひ出して外の女を迎へれば不道徳の人と言はれるし、困つたことだと思つて家の中がさつぱり面白くない、斯ういふやうな人間もいくらもあらう。是は唯だ男女の關係に就いて言つたのであるけれども、それは夫婦ばかりではない、親子の關係、主從の關係、社會の關係、或は又自分に病氣がある爲めとか、いろいろの事の爲めに人生は苦みに蔽はれるものである。外部から見て幸福のやうに見えても、その内部生活といふものは、殆んど全部の人は煩悶懊惱の人生を送るものである。釋迦如來はその總ての人に安穩の樂を得せしめやう、如何なる境遇に居る人でも精神の滿足幸福を失はないやうな人にしやうといふことを目的として世に出たと言はれる。是は非常に有難い思召で、宗教の本領は其處に在るのである。無論社會の改造も國家の進運も圖るのであるけれども如何に國家が發達し社會が改善されても、どのやうに理想的に造つても、人生といふものは精神の力を養ひ、精神の法悅を增さざる限りに於ては、眞の幸福は無いのであります。それは社會を皆な理想的にして見なくとも分る、今日相當の地位あり、相當の富を有つて居る者は、先づ外部から見ての幸福の境界であるが、それがやはり今申す通り精神上の力を得ない限りには幸福でないのである。如何に社會を改善しても總ての人をして百萬長者にするといふことは難かしい、又それは百萬長者にして見た所が、その人の内部生活といふものは悶へるのであるから、どうしても精神の内部の救濟は無かる可からざるものである。それから第二は世間の樂といふことでありますが、是は一般生活の所謂普通人が言ふて居る實生活といふことである、その世間の生活に於て、成べく彼等が達者で、商賣が繁昌して、この現在の生活の幸

福が得られるやうにといふことが世間の樂である、世間一般人が先づ認めて是が仕合せな事だと思つて居るその事を殖やしてやりたいといふのである、であるから釋迦如來は、金持が貧乏人になつたら宜いとは思つて居らぬ、どうぞ貧乏人はその貧困より救つて、物質上に於ても不足の無いやうにといふので、一般佛教信者には大いに施しを奬勵せられて、社會をして所謂不幸の人無からしむるやうに世の中を教化されて居るのである、釋尊の教化を受ける者の中には、政治家も居れば、國王も居れば、長者も居るので、その國王に向つては、汝は仁政を布け、長者に對しては汝は施しを爲せよといふことは、必ず釋尊の說かれたことである、これは皆この人生生活の幸福を增すべく釋迦如來が努力したのである。或は印度に傳はつて居つた惡い階級制度を打破せられた――社會の階級といふことは、總てが惡いとは思はぬけれども、今日のやうに唯だデモクラシーといつて、何でもかんでも特權を否認することは行き過ぎて居る、適當な程度に於ては社會に階級があつても宜しい、差別がありても宜しい、先生と生徒の間には階級無かるべからず、親と子の間にも、世話して與れた人と世話された者、會社で言ふならば前から勤めて居る者と新米の者との間には階級があつて宜しい、技術に於ても能率の高まつて居る者と低い者、下手な人と上手な人の間には、それは賃銀の違ふのが當然である、車挽きでも能く早く駈けるのと、ノソ〳〵した遲いのとは、賃段が違ふといふことは當然である、それがいけないといふは眞理で無い。けれども餘り極端に社會に無數な階級を作ることもいけない。それで印度に於ては婆羅門の教から來た四姓の制度といふものがあつた、政治家と、宗教家と、商人と、勞働者と、この四つの外にモウ一つその下に施陀羅といふ奴隷の階級がある、釋尊はこの奴隷制度を極力改善せられた、佛教を信ずる限りは人を奴隷の如く思うてはいかぬ、人と奴隷といふのは同じものであるといふことを、釋迦如來は盛んに說かれた。又四姓の平等を主張し、自ら刹帝利といふ國王の位地に御座つたけれども、それが鐵鉢を取つて、如何なる階級の低き者の門前にも食物を貰つて生活をするといふことをやつて、非常な激しい四姓の階級を打破したものであります。併ながら長幼序ありといふやうなことに就ては、釋迦如來は、師匠を敬ひ、長者を崇め、先輩を大切にするといふことは、社會の秩序上無かるべからずと言はれて居る。唯だ平等といへばむやみに權力者をはり飼して一つにするとか、差別といへばむやみに差別するといふやうなことは、狂人じみた話で、永遠の人生は

左様な方針で完成するものではない。故に釋迦如來は世間の幸福を増し、世の中を平和に發達せしむるには秩序を重じたまふたのである、破るべきは破り、立つべきは立てられた、そこが圓滿なる東洋思想である。西洋の思想は破るべからざるものも破つて、後とでは直ぐ後悔する、まるで考の足らぬ血氣の書生が、事をやつては失敗り、事をやつては失敗ると同じやうなことを繰返すのである。であるから西洋の文明は、一番思想の定まらない青年に迎へられる、これは西洋の思想が白面書生的の議論が多い證據である、思慮ある者は贊成しない、西洋文明の特色が即ち白面書生的の思想であるが故に、白面書生に歡迎せられるのである。釋尊の思想を今日の青年が信じ得ないのは、その思想が圓熟して居るからである。

左様に釋尊は世間の業といふことに就て非常に骨を折られた。その骨を折られた明白なる證據は、釋尊の教化を受けた弟子のことが『增一阿含經』の弟子品に列ねてある、在家の男の信者、女の信者、或は僧侶、比丘尼、何れもみな働いた人の事がズツと出て居る、それは非常に澤山あります。その活動せられた方面といふものを考へたならば何でもある、釋尊の直接教化を受けた羅漢は、日本の繪などを見ると、口を開けてポカンとして居る所が描いてある、けれどもどの羅漢もどの羅漢も口開けてはたらかんといふやうな事をして居つたものではない、非常な熱烈な活動をして居る。當時釋尊に教化せられた佛教徒の活動は全く偉大なものである。その活動が偉大であつたればこそ、この海山隔てゝ居る日本にまで來て、佛教が盛んになつたのである、この通り澤山の寺まで出來て居るのは、これ皆佛教徒活動の遺烈が茲に及んで居るのである。口を開けてポカンとしてはたらかんものであつたならば、迚も日本に佛教が來て弘まる譯はないのである。その佛弟子の活動振りを考へて見ると、今の日本の大乘佛教と誇つて居るものが、何れも千篇一律、寺に引籠つて榮螺のやうな生活をして、音がすると引込んでしまふといふやうな風で、嗟だ葬式に出て導師となり、鐘をガンといはして、覺えたお經を二三枚繰返して居るといふやうな、左様な貧弱な生活をしたものでない、あらゆる方面に活動をして居る、或る人は少しも佛教を知らない方面に傳道する爲めに、非常な困難を侵して進んで行く、それがどういふ人かといへば若い娘である、未だ結婚もしない若い娘が、釋尊の許しを受けて、未開の婆羅門の國に教を弘めに行きたいといふので、一人して進の助けをも受けずしてその異教徒の中に立つて奮闘して居る、鉢摩提女といふのがある、これは實に立派な者でありま

す、婆羅門が五千人も寄つて迫害を加へて、その女の居る所を焼打するといふ時にも、少しも驚いて居らない、如何に壓迫をしても佛を信ずる信念は動かすことは出來ないといふので、「女人たりと雖も志剛屈すべからず」と言つて居る、お前さん方が幾ら迫害を加へても、佛陀を信ずる婦人は精神剛健であるが故に、斯様なことに於て少しも恐れを慘くものではないと言ひ放つた、實に立派な者であります、今日の日本の堂々たる僧侶にして、何でもない事にビク〳〵して震へ上つて居るやうな者とは違ふ。又或る者は世の憐れな人を救ふが爲めに、丁度今日の養老院のやうなものを拵へて老人の世話をして居る婦人もあれば、捨て見を世話して居る者もあれば、或は今の所謂教育事業のやうに、何にも知らぬ者に善い事を教へたり、字を教へたりして居る者もあるし、皆さかんに色色な事をやつて居る。約二百四十人程の僧がありますが、それが皆それ〴〵違つた事をした特色が擧げてある、同じ事をした人も幾人もあるけれども、同じ仕事をした者を擧げても仕方がないから、多少づつ變つた仕事をした、その中の代表人物が二百人以上擧げてある。

それであるから日本に佛教が渡つた最初の働きを見ても、未だ佛教を研究するの、宗派を立てるのといふことにならぬ内に、初めて佛教の運動が起つた時代をしたかといへば、第一は文化開發の運動であつて、日本の文明がそれが爲めに非常に進んで、日本人の思想でも、道德でもあらゆる日本の文明は、佛教が這入つて非常な進歩をしたのである。それからその事業としては、聖德太子が建てられた大阪の天王寺の如き、その中には療病院を置いて、今の病院のやうに病氣を治ほすやうな事をする、或は施藥院を置いて、貧乏人には藥を無料で施こす、或は養老院を置いて年寄りを養ふ、それから學問する學校を置いて、教化布教に任ずる所の人を養成するといふやうな風になつて、一つのお寺の中には、病院もあれば、養老院もあれば、施藥院もあれば學問所もあるので各種の事業を總括して一つの寺になつて居つた、何院といつて少し大きな寺には澤山の寺中があつた。今はその寺中といふものが、皆同じやうに榮螺的の生活をやつて居つて何も事業をやらぬ、嗟だ檀家の回向と葬式だけをやつて居る。この一つの大きな寺院組織の中に寺中が出來て居るのは、分業から起つたので、その聖德太子の活動に導かれて、いろ〳〵の社會事業、救濟事業が發達をして參つた、有名な聖武天皇の皇妃の如きも、皇后でありながら自から病人の看護をなさつて、藥湯を立てゝ病人を治ほし、傳ふる所に依れば癩病患者を

自から勞はつて看護をし給うたといふ、有名な話がある、これ等は皆佛教の感化からであります。佛教の感化が無かつたならば、どうして左樣な身分の高い人が、病人の看護をするといふやうな觀念が起りますか。これは儒教から來たものでもない、神ながらから來たものでもない、確に佛陀の慈愛の精神の感化が、斯の如き事業を現はしたのであります。上皇后陛下すらも左樣になさる位であるから、下々の者も、殊に女は優しくしなければならぬといふ觀念は、ズツと一般に起る譯である。左樣にして皇后陛下が看護などを爲さる觀念にお立ちになるやうになつたのは、釋迦如來の教の中に、看病といふことの功德が盛んに說いてある、お經では「看病」と同じ意味で「瞻病」といふ字が使つてある、「瞻」は「みる」といふ字で、「瞻病者」とお經にあるのは、今日の看護人のことである。この瞻病の功德は非常なもので、婦人第一の修養となつて居る。嫁に行くには針仕事を稽古して置かなければならぬと同時に、寧ろそれより以上に看病の稽古をして行かなければならぬ、家庭には必ず病人があるから……といふことになつて居つた今日でも流行性感冒が勢を逞うして、看護婦が無いといつて困つて居るが、釋迦如來の今の教に從つて、女たる者は一ト通りの看護の心得を有つて居るといふことであれば、又男にも教へることも出來るから、手が足らなくなればその女が男に教へて看病することも出來て、斯樣な場合にて必ず役立つのである。然るに今日は看護人が無くて、家族數人感冒に罹つて居るといふやうな家庭を見れば、實に悲慘なものである、看護婦を尋ね廻るけれども來て呉れない、或は親父がまごついて居るとか、或は息子がまごついて居るとかいふことになつて、實に目も當てられぬやうになつて居る。そこで釋迦如來は看護といふことを非常に重くお說きになつた、これも皆な世間の幸福の爲めに御しやることであります。死んだ人間に看病人を置く必要は無いのであるから、佛教が未來教であるならば、看病の德を奬勵する必要はない。

斯の如く釋尊の教が世間の幸福を與へんとせられたことは、洵に明白でありますが、更に「涅槃の樂」と言はれたことは、これは無論死んだ先きも續くのでありますけれども、佛教では元來この世と未來といふことを、普通人の考へて居るやうに二つに切離さないのである。生命の存續でありますから、今日も過去の生命の繫がりであるし、未來といへども今の生命の繼續である、今の人は餘りに肉體にのみ重きを置いて、生れた時にポンと出て、死んだ時にポンと無くなるといふやうに、形の方に重きを置くから、現在未來といふことが非常に區別が附くけれども、未來といつて見た所が今日の生命の繫がりである、過去といつた所が今度生れて來る時初めて魂が出來たものではない、神樣が拵へたとか、ポンと自然に出來たとかいふが、そんな事で出來るものではない。又死んだからといつても、斯の如き靈妙なる、形も無くして働いて居る無限の靈性が、ポンと消えるナンといふことはない——「しやぼん玉か何かなら、膨れて居つても內の空氣が出れば割れて消えてしまふだらうけれども、魂といふものは、しやぼん玉みたやうに、空虛にしてポンと消えるといふやうなものではない、形も無ければ色も無い、大きいとも小さいとも、長いとも短いとも言はれない、實に微妙なものである。さういふ微妙なものであるから、刀を以つて斬ることも出來ない、身體は斬れるけれども魂を斬ることは出來ない、火で燒くことも出來ない。水で溺れさすことも出來ない、身體は水に溺れゝばガブ〳〵ツと行つてしまふけれども、魂は水に溺れるものではない、釋迦牟尼は魂に就ては、火も燒く能はず、水も溺はす能はずと說かれた。その偉大なる生命の繫がりであるから、元來佛教のやうな哲學的觀念を有つて居るものが、未來教だの現在教だのといふ、そんな素人くさいことを言ふものではない、必ずや吾々の一つの觀念は、現在から永遠にズツと續いて行くべきものである、そこで涅槃といふことは死後の事ではない、現在の生活の中に小さく考へて居る我を打破つて、その中に在る大きな自分を發揮するのである、有始有終の小我に囚はれて居る觀念を打破つて、不滅の我であるといふことを自覺するのである。さうしてそれが一時の考へ、一瞬の議論であつてはいけない、「さうかナ、魂は消へぬものかナ」と思ひ居るけれども、又「イヤやつぱり消へるものまでは魂の事は能く分らなかつたけれども、佛の教を信じて見れば、今申す通りに人の魂といふものは消えるものではなくして、無限の生命の存續である、それが果報の力に依つて遷り變るので、誰も無理にこれを地獄に拋り込むのではない、自分の爲したる惡事の報酬の力が、自分をして或は畜生に、或は餓鬼に、或は地獄に導くのである。自分をして幸福なる佛樣の覺りに上らすのも、誰も手を引つ張るといふ譯ではない、自分の爲したる功德、善根の力が菩提を成就せしむるのである。であるからこの現在に生活して行く間の業を慎しまなければならぬ、この業が惡業であれば自分は墮落する、これが善業であれば向上するのであるから、その業を慎

しめよといふが、釋尊の教となつて現はれたのであります。

そこで佛教の信念が確立しますれば、現在の生活の中に不滅の我を確信するのである。眞の我は永遠に死なゝい、肉體は死んで行くけれども、今あるこの生命は、何者にも奪はれるものでない、唯だ業の力に依つて變り行くのである。抑〻人の心といふものは、十界具足の本體であつて、一つの心の內容には、佛になる性質もあれば地獄になる性質もある。それは既に現在その閃きは見えて居る、時に非常に惡心が起つて、人を叩き斬らうとするやうな料簡にも現はれて來る、さうすればそこに自分の精神に地獄に相當する意味があることが分る、或る時は我が心の中に淨い大きな優しい考が湧いて來る、我が身ながらも佛心に似通つて居るものぢやといふやうな事が、時々顯れを出す。であるから一つの心といふけれども、それは十界具足の妙體で、下は地獄より上は佛になり得る性質を悉く有つて居るのである、それが佛の教へたまふた大事な點である。耶蘇教で言ふやうに、人間は罪の子ぢやとか、それは洗禮で水をかけたら淨くなるとかいふやうな、簡短なものでない、人々みな左樣にして十界の總てを有つて居るものであるから、業の力に依つてこれを導き出すのである。同じ米でもちよつとしたやり方に依つて、酒にもなれば酢にもなれば、又燒酎にもなれば甘酒にもなるのである、元は米である。併しその味では甘酒と酢と燒酎とは非常に違ふのである、それはちよつとした工合で、酒でも直ぐ酢になる、酒を德利に入れて置けば、ちよつとした加減で直ぐ酢になる。であるから日蓮聖人は澁柿の譬を取つて示された、澁柿は澁が變らぬ間は澁くて食へないけれども、ちよつと微溫湯に入れて僅か一晩置けば、翌朝は甘く變るのである。澁柿を甘くすることは、田舍のお婆さんでも知つて居る、その湯の加減が大事だ、餘り湯が熱過ぎれば軟かくなつて皮が剝げてしまふ、湯が餘りぬるければ澁が拔け切れない、これは斯ういふ工合にすれば宜い、妾は澁を拔くことが上手だといふやうな事を言ふお婆さんは、何處の村にも幾らもある、決して嘘かしいことではない。或は東京でいふ樽柿といふものでも、澁柿を取つて酒樽の空いた內に入れて來るのであるけれども、樽に含んで居る酒の力を以て、東京へ來る間に澁柿が甘くなるのである。斯樣な譯で、吾々の心に持つて居るものは十界具足の妙體である、ちよつとのやり工合で地獄も出れば、餓鬼も出る、佛も出るのである、現在今の社會の有樣でも、一歩やり損へば露西亞のやうな修羅の巷、畜生の巷となつて居る、一國の王樣をも叩き殺して、古井戸に打ち込むといふやうな殘忍なことは、人間の仕業とは思はれない、修羅界である、それから又今日の風教の紊れて居る如き、この間の新聞にもあつたが、露西亞の婦人にして梅毒に犯らぬ者は一人も無い、せ何なる娘と雖も孕められて、梅毒を背負つて居るといふことがあつた。左樣な風になつて社會の秩序が紊れるのは、畜生殘害の世界であつて、人生ではない、あんな樣を進歩とか社會の改良とかいふのは、人間をして修羅とし畜生とするやうなものである。如何に物を變へるからといつても、嚴正な常軌が無ければならぬ、面白いからやつて見やうといつて、畜生の眞似などをして見た所が仕方がない。併しそれが直ぐ出易いのである、日本人でも出ないとは言へない、少しぼかして置いて、考の無い人に委せて置いたならば、日本を修羅の巷とし、畜生の世の中にすることは左程に骨が折れないのである。又教化を興して之を善く導けば、人でありながら神の心に通ひ、佛に似たやうな氣分になつて、世は現在にしてそこに淨土が現はれ、そこに天國が現はれて、美しき人生が發達して行く、これ皆人の心中に色々の方面を持つて居る證據であると、釋迦如來は說かれて居る。

斯の如く自分の本體の偉大なる値打を知つて、假令何物を奪はれてしまつても、自分自身が無限の寶であることを知らなければならぬ。倉の內にある米とか、金庫に這入つて居る株券のみが尊いのではなくして、左樣な物は自分と離れる。昔日本の或る皇后陛下がなさつたやうに、「自分が死んだら唯だ棺桶に入れた儘で擡いで葬式して呉れ、さうして腕は棺桶の兩方に出して置いて呉れ」といふことを言はれた、「どういふ譯でございますか」と言うと、「假令一國の天子樣の御后になつても、一たび息絕えて死んで行く時には、手に何も持つて行くことが出來るものではない、この通りのものだといふので、棺桶の外に手を出して葬式をして呉れ」と言はれたといふことがある、そこに非常な教訓があるのである、この間私或る實家の妻が無くなつて葬式に行つた、大勢身內の者が寄り、娘共が寄りして、「お母さん〳〵」といつて歎いて居りましたが、最後に棺桶に釘を打つときに、後に名殘の無いやうに是も入れて上げませうといつて、小さな信玄袋に色々な物を入れて、この中に鏡も這入つて居ります、櫛も這入つて居ります、電車切符も這入つて居りますと言つて、すつかり棺の中へ入れて居りましたけれども、それはその晩火葬場で直ぐ灰になつてしまふので、その死んだ人の行く前途に對しては、信玄袋も切符も何の役にも立つものではない、唯だその人の生きて居る間に爲したる業の力

に導かれて行くのであります。この意味は如何にも眼正な教訓であつて、如何に世が遷り變つても此の大規律は變らぬ。であるから生きながらにして自分の心に非常な値打があることを知り、さうして生きながら不滅不死の自分を見出して置くことが、「涅槃の樂」といふのであります。それが一つ得られたならば、日蓮聖人の如くに、首の座に坐つて首斬られんとする時も、

臭き首を法華經に捧げて金色の如來となるは、砂を以て黄金に代るが如し。

といふことになつて參ります。この觀念が一つ確立しますれば、國家の爲めに盡すにも、社會の爲めに盡すにも、本當の仕事が出來る譯であります。その自分自身に就ての解說、安立が無くして、他の仕事をしやうとしても、眼がグラついて居つて人を引つ張るやうなものである、蹴が人の手を引いて行くやうなもので、自分がグラ〳〵でありますから、立派の仕事は出來ない、故に社會の爲に盡さう、國家の爲に盡さうとする者は、自己が先づ解說して、自分は何時身一つでこの世を離れても一點悔む所は無い、丁度日蓮聖人が、佐渡ケ島に離れても日蓮ほど幸福なる者はないと考へて居つたやうな安心立命を有つて、さうして活動に就くのが、思想的の文明を造る原動力であります。

斯樣にして佛教の信仰は、世間の樂と涅槃の樂とを併せ與へんとして起つたものであるから「此の世の事はどうでも宜い、死んでから阿彌陀さんの所に行け」と言ふ淨土門を開いて、釋迦を罵るといふやうなことは、全く釋迦如來の精神に背いたものであります。その反對に又不動さんを捨ぎ出して來て、火事に遭はないとか、金が儲かるとか、或は帝釋樣などをお祭りして、これに參詣すれば病氣が癒るといふやうなことを言つて、永遠の生命の問題と離れたものを信仰さすのは、これ皆佛教の本旨ではない。不動さんの所に行つて今言ふ涅槃の樂み、永遠の生命はどうちやと言つても、さつぱり不動さんに就てはその觀念が起つて來ない、帝釋天の前に行つて「自己の本體如何」と聞けば、「他も實はその點は迷つて居る、その爲めにお釋迦樣の所に教を聞きに行つたのだ、全體お前等が他の所に來るのが間違つて居る」と言はれる譯なのであるから、無限の生命の問題と切離して信心するのを、佛教ではこれを迷信といふのである。未來の一方に傾いてしまつてこの世を忘れるのも佛教でない。不動明王とか、帝釋天王を捨ぎ廻すが、これ等は婆羅門教の神で、釋迦如來の教の中には左樣なものを本尊にするといふ意味は出て居ない、これ等の迷へるものは皆な釋迦の教の中に來つて法を聞いたといふことがお經にあるのである。佛教は偉大な教であるから、婆羅門の神と雖も迷へるものであると釋迦が說いた時に、梵天帝釋が來つて教を聞いたといふことが法華經にもある、けれどもそれが本尊になるといふやうなことは、何處にも無いのである。あゝいふやうなものはこれを俗信といふので、學問をしない者の間に起ることである、斯ふいふやうな間違つた事こそ、佛教を改造する上から大いに改革しなければならぬ。今日の佛教に就て改善のことを叫ぶならば、今申す二世貫串の大信仰を發揮するやうに、「それに反したる佛教徒は改めよ」といふことを、學者も政治家も共に努力することに於て、初めて効を奏するのであらう。少しは識見を養はなければならぬ、宗教がよいと言へば何でも宜いと言つたり、いかんと言へば何もかもいかんと云ふやうな、餘りに粗雜な事を言ふて居るが、それは恥かしいことである。（此章未完）

一宮町の民力涵養

愛知縣中島郡教育會主催の下に六月十三日午後二時より、本多總裁閣下を屈請して、一宮町公會堂に於て民力涵養會を開く、聽衆は郡教育會員及同地統一團員等にしてさしもの廣き會場に溢る。閣下は「民力涵養に就て」の題下に前後三時間半に亘り、先づ一食條の說話と五大要綱の精神とを說し來りて、次で思潮の方針に轉じ、新思潮派と因循派とを排して中正不偏の態度に帰るべきを論じ、更に其の方針として我國固有文明の體系的發揮を奬め、一、祭神道に就ては國家の經營、皇室の尊嚴、國民の忠誠、包容の靈、敬及び敬神の觀念を說き、二、聖賢の教に就ては、總論の調節、天道明德の思想、仁義忠孝の教を奉げ、三、佛陀の教に就ては、東洋哲學の中堅道德の根柢、宗教の信仰、及び社會教育の團束等を數へて、更に三等三教を陶冶し調整せる我國固有文明を基礎として、西洋文明に對し眼正なる批判を試み、イ、希臘文明の長所は哲學と及び人生生活を豐富ならしめし點に存するも其弊の走る所、前者は人生懷疑に導き、後者は享示に溺れしめし事を說き、羅馬の文明は國家と及び法律的統治を敎へしも、其所に法律萬能の弊を誘致せる事を說き、ハ、ペライの文明は基督教の愛の教を說けるも哲學及び科學の智識を輕ふする結果中世紀に於ては教會政治の暗黑時代を現出し、又近世に於ては希臘羅馬の文明の復活によりて其の神力を失墜せる事を說き、ニ、チユートン民族の文明は自我の觀念を敎へたるも其の病弊の走する所勞働問題等を誘發して國家の統率力を弱めし事を示し、西洋文明には長所と短所との存するを以て、恨に心酔すべからざる所以を說いて、現代思想の遺憾を懇切に明示せられ、午後五時半講演を退き給ふ、會衆一同酔えるが如く長時間の講演を聞きたり。

照顧脚下（其二）

山内樓溪

所が明治維新以來段々日本の國勢が變化を致しまして、過渡期に際會したのと、それから今日世界各國の形勢が非常な變化を來し、惡化を來した爲めに、この東洋に獨特して居る所の信念國に向つて、有らゆるパチルスが包圍して來たといふのが大正現代の有樣である。この世界の惡化、思想のパチルスが飛んで來て今日日本を包圍しつゝあるといふ爲めに、日本の心ある人は非常な心配をしつゝあるのであります。故にこの秋に際してはお互に七千萬の兄弟が、海外各國はいざ知らず、日本だけは違ふぞ、吾々の皮下を流れて居る所の血は、祖先以來繼續して來た血であるから、海外各國の血とは違ふぞといふ大丈夫の觀念が無ければならぬのである。

さう考へ來るというと、唯だ今日五大國の仲間入をした位で滿足をして居つては、それは日本人の素質を忘れて居るといふものである。これはモウ昔から或る偉大なる人は言來つて居るのでありまして、吾々國民の血は世界各國と對等の血ちやない、特等に列國の上に出なければ濟まないだけの、祖先傳來の血を承けて來て居る、その血の中には今言ふ所の大信念が傳はり來つて居るのであります。神武天皇が大和の橿原に都を奏められた當時にも、國民に此の事を話げられて居ります、その御勅語の最後に

六合を兼て都を開き、八紘を掩うて宇と爲す、亦可からずや。

と仰しやつてある、六合――東西南北上下を兼んで到る處に日本人の正しき信念と正義とを傳へる、その正しき信念と正義との光に依つて世界各國を照す、日本化する、亦可からずや――眞に愉快ではないかと仰しやつたのが、神武天皇の奏都の詔勅の御末の言葉であります。爾來今日に至るまで日本にはこの意氣が繼續して來て居るのである、唯だ時に暗くなることあり、時に明るくなることあり、四圍の關係、妨害が加はつて火の消えたり燃えたりする如く明暗はありますけれども、絶對に消えたことはないのである。而もこれが明治先帝の時代に至つて一層明瞭になつて、千年の黑雲を切つて落されて、明るくこの祖先以來の大信念が光を放つて參りました。

先帝の御教訓をなさつた事柄は悉くこの信念から出たのである、教育の勅語にもせよ、陸海軍人に下し賜はつた勅諭にもせよ、その他戊申の詔書にもせよ、明治天皇の勅書なるものは、悉くこの祖宗傳來の大信念が溢れて、あれだけの御言葉をお使ひになつて國民を御教訓なさつたのである。

先帝崩御になつて世は大正の時代に至りまして、世界の變化は實に激變とも何とも形容すべからざる程の勢ひを以て、吾々の眼前に世界の地圖が變化してしまつた、露國あの通り崩壞してしまひ、支那は以前の清朝亡びてしまひ、獨逸亦帝國は瓦壞してあの通りになつてしまつた。地圖の變化位はまだしもである、この思想界の變化と來たら、日本どころの騒ぎではない、學者各國に於ける人間の精神界の變化といふものは、劇變とも惡化とも、形容の詞の無い程の有樣になり來つて居るのである。それが日本に向つて或は書物となつて這入つて來る、或はその他の印刷物になつて這入つて來る、モウ一つ甚しいのは書物や印刷物でなく、直接に這入つて來る、これは西伯利の現狀をあなた方が御覽になつても分る、西伯利のあの亂麻の如く紊れた過激思想が、西伯利から支那に來り、支那から朝鮮に來り、朝鮮から日本の本國に向つて直接に海嘯の押寄せるが如く來りつゝあるのが今日であります。これは只事ちやない、實に驚くべき時代に際會したのである、丁度日本の現狀は、千丈の懸崖の上に立つて居るが如きものである、若し活眼達識の大人物あつて、健全なる教を以つて日本の現狀を救はなかつたならば、日本の思想界は千丈の谷底に墜落されてしまふのであります。

その懸崖から千丈の谷底へ墜落されないやうにするには如何にしたら宜いかといふのが、今日の一切の世間の問題に超越して研究すべき根本の最大問題であります。この觀念から眺めたならば、一切の世間の問題は問題になつて居りませぬ。政治がどうだといつても根本の政治議論といふものがあるのちやない、あれは唯だ利害關係に依つて、斯うすれば自己の利益である、斯うすれば自己の害であるといふ、丁度非文明の商人が商賣をすると同じやうな譯で、自己本位である、政黨は自黨本位でやつて居るだけで、「政治の根本義がどうである、斯うである」と言ふやうな者は、之れを現狀に通じない迂濶なる人といつて嘲けつて居る、それが現代に迎へられて

居るやうな有様であるから、成つて居りませぬ。學者はどうであるかというと。學者亦政治家が政治の本義を忘れて政治を爭つて居ると同じく、學者の根本本領を忘れてしまつて居る。自己の學藝を衒ひ、自己の名を賣り、或は自己の半熟したる考を公けにせんとするやうなことで、學問の切實りをやる位の程度にあつて、如何にしてこの懸崖の上に立つて居る日本の思想を安全に喰止め得るか、或は一歩を進めて世界を照す程の光彩を放たしめるにはどうしたら宜いであらうか、といふことを考へて居る學者は殆ど無いと言つても苦しからぬ現狀であります、又商業家、工業家はどうであるか、この現在の日本を名乘つて海外各國と商業工業の上に於て競爭をするには、如何なる方面から出發したら宜いかといふ事柄に就ては、これ亦思のある人は少いのであります。

斯の如く百尺懸崖に立つて居る日本の立場からあらゆる社會を顧みますと、實に一刻も猶豫のならない、由々敷き形勢に遭遇して居るのであります、これは或る人が言つて居りますが、斯うなるが當然である、今日は佛樣の教に於て末法といふが、今日はその眞の末法の中心に當りかけて居るのである、同じ春といひましても、未だ一月頃は春らしい氣分はしない、二月も未だである、今日の暦で二月を過ぎ四月に入つて、將に百花が紅の唇を開かんとし、柳は綠の眉をはくといふに至つて、漸く眞に春らしくなつて來ると同じく、佛樣の教の末法といふことも、今より百年前二百年前には未だ末法らしくなかつたが、今日實に日本の危急存亡を決する大事に際會した、今日が末法の末であるといふ位の有樣である。この意味から考へると、世界の大戰爭は日本の大覺醒を促す爲めに、天の取計ひに依つて斯ういふ大戰爭を起させて、世界と日本とを對照させ、世界と日本とを結びつけやうといふので　或る者が或る意味に依つて、茲に斯ういふ大覺醒の動機を與へられたものであらう、といふことも申して居る人もある、私もサウ信じます。今日は實に日本が死ぬか生きるか、世界に冠ちざる文明國として有らゆる文明の素質を發揮すべき端緒が茲に開けるかどうかといふ場合に際會したのであります。これは諸君の覺材が海外と直接の關係を結ばれた居るといふ、あなた方の立場に立返つて考へて御覽になつのら、容易ならざる今日である、相手は悉く世界である、一つ違へば日本の同胞はみな危ないのである、この場合内輪で兄弟喧嘩をすべき時ではありませぬ。經濟上から言つても世界中が寄つて日本を取卷いて居る、この世界からどういふ影響が來るかといふことを着眼して、經濟の方針を執らんければならぬ如く、又あらゆる問題――國防の問題にもせよ、政治の問題にもせよ、世界列國の中に、陸軍としては何處に眼を着けるか、假想敵國は何處であるか、海軍としては何處に眼を着けるといつて假想敵を設くる如く、吾等の思想界に於ても、どういふ譯で今日斯うなつて居るか、この場合どういふものを思想の標的として、國民一體に自覺したら宜からうかといふことが、茲に投つけられた大問題ではありませぬか。

茲に所謂信仰の眼を開いて足許を顧みると、あなた方にせよ、吾々にせよ、この時機に當りました以上はどうしても、歐米各國の人種と對抗し得るだけの、一頭地を拔いただけの或るものゝ下に立つてやらぬといふと、商賣も駄目であります、工業も駄目であります、政治も駄目であります、陸海軍の軍備も駄目であります、必ず一定の根本に立脚つたる據り所に依らなければならぬといふことに、問題は歸着するのであります。

それは如何樣な所に依つたら宜いかといふに、少くとも吾々の身體といふものは、自分だけの體でないと覺悟しなくてはなりませぬ、　天皇陛下より吾々がお預りをして居る體である、これは自分の自由に傷けたり、殺したり、驕いたりしては、至尊陛下よりお預りをして居る所の大事な體である、而も能く考へて見ると、世界第一の大聖釋迦牟尼佛と一點異らないだけの大佛身を吾々は所有して居る、實に嘗ければ全世界を照す程の光を發すべき性質を有つて居る立派な體である、而もそれが　陛下よりお預りの體であると考へなくてはならぬのが、日本人の最大道德の心得方であります。これは六百五十年前に我國に降誕をされました日蓮聖人に依つて、實に吾々の體は本佛釋迦牟尼佛と一點異ならない所の立派な佛樣になるべき種を有つて居る、而も現在に於ては　天皇陛下のお預り體であつて、自分の體ではない、

陛下の前に向へば七千萬の國民みな赤子の如きものである、この場合勞働者であらうが、資本家であらうが、自分の資本ぢやない、自分の勞働ぢやない、これは　陛下のお預り品であつて、海外各國の人に依つてどの點からでも一點非難をさるべき點の無いだけに、修養を積んで磨き上げんければならぬといふのが、今日日本人の心得べき最大要點であります、一般にこの觀念が富んで來ましたならば、今日の諸問題などは火の手の擧るべき氣遣ひはありませぬ、又如何に歐米各國から過激思想が來りましても、吾々の出發點は西洋とは違ふぞ、吾々は右申す通り日本の祖先から西洋とは異つた大得られる體ではない、至尊陛下よりお預りをして居る所の大

信念の下に出發をして來て居るのであるから、之を以て彼等の過ちを正すことが出來るのであります。この自覺が立ちますというと、歐米と比較して見ても――成程金は歐米の方がある、けれども日本は金だけで闘ふのではない。併し金の足らぬ所は金も儲けなければならぬ、又その他歐米と比較してあらゆる點に於て歐米に劣つて居る點もあるけれども、それは彼の長を採つて我が短を補はうではないか、併し彼等の到底全て及ばない特質を我は有つて居る、それは何であるか、神同樣、佛同樣の大尊嚴を有つて、吾等は　陛下を敬いて陛下と結晶して居る、文明の導師である、導師は一歩先きに進んで居らなければならぬ、百歩も進めば尚ほ結構だが、一歩なりとも先きに進んで、歐米各國の人を引立てゝやらうといふ程の導師になるべき素質を有つて居るのである、斯ういふ自覺がお互に開けて來るべき筈であります。それは屢々繰返して言ふ如く、あなた方の製作品が世界を相手にされる如く、其製造品には信念が始終加はつて、物質上からの關係と、精神上からの關係と、二方面から彼等に及ぼすだけの原動力を、吾々は深く修養を積まなければならぬといふことに歸着するのであります。

私はこの意味を以つてあなた方が陛下を頼みて、一人を責むるの意を以て先づ自らを責めよ」といふ古訓に顧みて下さつたならば、恐か『照顧脚下』の意味がそこに閃めいて來るであらうと存じましたから、この心持をお話をしたのであります。どうかその意味で自分を省みて修養を積んで敬きたいといふのが、私のお話の要點であります。（了）

江村逍遙

『江村獨逍遙、
白雨蔽青巖、
殘雷聲已遠、
顧發揮天賦、

是詩

『直欲撒玄關得詩、
風雷迎筆鬼神鮮、

失題

『我似蘇崖樹、
鏘々大雅聲、
唯喜明月照、
開眉慶念動、

櫻溪倘史

野趣觸心絃、
幽花笑墓邊、
復見夕陽鮮、
欲歌斯太玄』

同

天門逆闘玉龍垂、
太白東坡以上詩』

同

風雷觸作詩、
天下有誰知、
照來開我眉、
何々巒山陰』

聖經

社會道德と國家道德との調節

本多日生

爾ノ時ニ秘密金剛手、復佛ニ白シテ言サク、世尊ヨ、佛ノ所說ノ如キ、諸佛ハ常ニ平等三昧ニ往シ、等シク衆生ヲ視ルコト猶ホ一子ノ如シト、今ハ云何ゾ但國界主ヲ守護スト言フヤ、諸有ノ貧窮孤惸ノ困苦シテ依無ク歸無ク救無ク護無キモノヲ、何ゾ愍念シ而モ守護シタマハザルヤ、爾ノ時ニ如來無上調御、秘密金剛手ニ告ゲテ言ハク、善男子ヨ、諦カニ聽ケ諦カニ聽ケ、當ニ汝ガ爲ニ說クベシ、諸佛如來ハ平等三昧ニ往セザルニアラズ、平等ニ由ルガ故ニ國主ヲ守護ス、善男子ヨ、譬ヘバ良醫ノ小子ヲ見ルニ身疾病ニ罹リ醫藥ニ勝ヘズ、乃チ良醫ヲ以テ母ニ之ヲ服セシメ、母ノ服藥ノ力及ビ乳ニ由ツテ、其ノ子乳ヲ飲マバ疾病皆除コルガ如ク、諸佛如來モ亦復是ノ如シ、一切ヲ哀愍シテ國王ヲ守護ス、若シ國王ヲ護レバ七ヲ護ルノ勝益アリ、何等ヲ七ト爲ス所謂若シ能ク國王ヲ守護セバ即チ是レ國ト太子ヲ守護スルナリ、若シ太子ヲ守護セバ即チ大臣ヲ守護スルナリ、若シ大臣ヲ守護セバ即チ百姓ヲ守護スルナリ若シ百姓ヲ守護セバ即チ庫藏ヲ守護スルナリ、若シ庫藏ヲ守護セバ即チ四兵ヲ守護スルナリ、若シ四兵ヲ守護セバ即チ隣國ヲ守護スルナリ、若シ能ク是ノ如クセバ一切皆安カラン、善男子ヨ、是ノ故ニ國王ハ諸ノ衆主ノ與ニ日ト爲リ月ト爲リ、燈ト爲リ眼ト爲リ父ト爲リ母ト爲リ、若シ諸ノ有情眼無ク燈無ク日無ク月無ク父無ク母無クバ身命存スベケンヤ、若シ國王無クバ安立スベカラズ。又等男子ヨ、大龍池ノ如キ、龍若シ住スル時ハ水常ニ盈滿シテ衆鱗魚鼈水族皆安シ、龍若シ去ル時ハ水便チ枯涸シテ水性ノ屬皆滅シテ餘リ無ケン、國王モ亦爾ナリ、故ニ我レ偏ニ守護國王ヲ說クナリ。

（守護國界主經、正大藏第十五卷の十）

此の一節は平等慈悲と守護國王との德欲の調節を明されたのである。

前段に於て佛が國界主を守護することが陀羅尼王であると說かれた爲に、秘密金剛手が佛に御尋ねして言ふのである、世尊の御說法によると、諸佛は常に平等三昧に住して居る、衆くの人達を慈愛する所の所謂博愛の精神に住すると說かれて居る、等しく衆生を視ること猶ほ一子の如く、慈悲が佛の精神であると說かれた、然るに今は何が故に唯だ國界主を守護すると云ふ、慈悲の心でなくして忠君の心を指して一番大切な事だと說かるゝはどう云ふ譯であるか、諸の貧窮者或は孤兒或は老いて扶養者の無き者、左樣な世に苦みを以て依る所もなく歸る所もなく救ふ者もなく護る者もなき哀れなる者貧困なる者、それを守りそれを扶けてやると云ふことをなさらないで、國王に忠節を盡せといふのはどういふ譯であるか、即ち現代の問題になつて居る貧民救濟とか社會政策とかいふことゝ忠君の道德と社會道德と國家道德との關係を尋ねたのである、其時に佛は社會道德の方を表にしないで國家道德を表にする、さうして其中に社會道德が行はれると云ふ所謂國家社會主義の政策を故に敎へられてるので、實に進步した思想であると思ふ、此問を發した時に釋迦如來は斯く答えれた、故に無上調御と云ふ佛の德を指すので此上もなき尊い方であり、人格の缺けたる調はざる人を能く調へ、荒馬の如き者を御して御出でになるから、佛が衆主を敎化せらるゝ德で調御と云ふのである、是は大事な問題であるから能く聽分けなければなぬが、汝の爲に其關係を說かう、諸佛如來は汝が尋ねる通り無論平等三昧に住して一切衆生を悉く慈むものである、其慈悲の精神、博愛の精神に於ては少しも休む所は無いのであるが、其平等慈悲の精神に依るが故に國王を守護するので、國王を守護すると云ふ事は、多くの者を見捨てて忠義を盡せと云ふのではない、多くの者の幸福を扶全せんが爲に國王に忠節を盡せと云ふのである、故に社會道德と國家道德は一致するものであり、社會の多數を救濟するが爲に國家を無視し、國王を斥けると云ふ西洋のデモクラシーの思想はいけない、ので、平等の慈悲を行はんが爲に國家を發達せしめ、國王を擁護して行くと云ふことになる。それは譬を擧げて說明して見れば解り易いが、名醫があつて小さい嬰兒の病氣に罹つて居るのを見た場合に、それは直接藥を飲め得ないし、藥を母に飲ましてさうして母の藥を飲んだ其力と乳との爲に子供がそれを飲めば病が治るやうなものであつて、直接に子供を救ふ事が出來ないから母に通じて救ふので

ある、諸佛如來もそれと同じであつて、一切衆生を慈むが故に國王を守護せよと云ふのである、即ち人民の幸福、世の平和と云ふものは國家の組織に依る、さうして國家の統一の最も能く行はれる所に於て得らるゝので、露西亞のやうに國家の統一を失ふといふと人民は苦に陷る、人民だけの幸福を圖らうとするから却て人民が苦みに陷るのである、故に國王を守るに於て七つの事柄が自ら守られて能く勝れた効果があるのである、七つと云ふのは國王を守るとに於て太子の威德が護られる、了度露西亞の皇帝が廢せられた時太子も併せて殺された、支那に於ても宣統帝が位を讓つた時には皇太子も退けてしまふことになつて、是は實に能く說いてある　必ずや其國王を倒した時には後の後繼者をも倒す、平家が倒された時には平家の子孫をも皆殺すと云ふことになる、國王が守られゝば自ら大子が護られる太子が護られゝば一國の大臣の位置も保たれる所謂一國の國家の秩序が立て行く、大臣があつて官民各々其所の宜しきを得て行けば人民の幸福が得られる、人民の幸福が得られゝば其中に國家の經濟が整うて庫が護られる、國家の經濟の發達して行けばそれによつて武力も維持されて行く、武力が發達して行けばそれによつて自分の國の獨立を維持するのみでなく、隣國を保護する、日本で云へば日本の武力は東洋の平和を維持して行く、隣國の平和の維持といふことは非常に宜いことであつて、それは決して侵略ではない、其武力を張るのは隣國を侵すのではなく、隣國の安寧を維持するのである、四兵と云ふのは多くの兵隊と云ふことである、若し能く是の如くにして國王を守護することに依て太子乃至隣國が守護さるゝと云ふことになれば、一切內の國民も外の國際關係も其平和が得らるゝ譯であるから、國王を守護するは內に人民の幸福を保全し、外に世界の平和に貢獻する、國人の幸福も人類の幸福も世界の平和も國王を守護し國家を發達せしむる中から得られる。故に國王は諸の衆生の奧に日となり月となり爲り燈と爲り眼と爲り父と爲り母と爲るので、其意味は種々の德を有する、主人の德もあれば師匠の德もあり親の德もある、大勢の者を能く導き且つ幸福を與へて行くのである、若し多くの生ける者共が眼なく燈なく乃至父なく母がなかつたならば人命を保つことが出來ないと同じ譯である、國王のない場合に於ては人民の安定は得られぬ次第である、是ば何處までも國家の結合を鞏固にして其統一を明にし、さうして人民の幸福を得らるゝので、國家が權威を失ひ統一が破壞されて來たならば人民の幸福は無いと云ふ議論である、今の西洋の危險思想なるものは遂に人民の幸福をも奪

ひ去るものであるといふ議論である。尚譬を擧げて、大龍池の如く、龍が住んで居れば水の滴ちて居るから、從つて其處に住んで居る魚などは皆安かに棲息することが出來るが、若し龍が去つてしまへば水が枯れて其處に接んで居る魚は皆死んでしまはなければならない、國王の有難いのは其と同じことであつて、國王の德に由つて人民が皆幸福を保全する譯であるから、人民を愛する慈悲の精神、社會的道德を思ふが故に國王を護れといふことが說かれてある、此點に於て社會道德と國家道德とを結合し、慈悲の精神と忠節の精神を結合し、而も忠節本位の國敎を立てられたのである。佛敎が國民道德と一致する點は爰にある、此一節と云ふものは如何にも明瞭なことであつて、是程明に忠愛の道德を說かれて居るは儒敎の中にも決してない、又神道の敎にも是程明晰に國王が大切であることを論じたものはない、西洋の學統には無論無い、日本の皇室中心の道德を說明したる多くの經典の中に此の一節が一番明瞭である、之を讀んだならば德川以來の儒者と云ひ、今日の敎育者と云ひ、佛敎に對して敬意を拂はぬ者は無い譯である、知らないから惡口を言ふので、恥を後代に曝すものだと我輩が言ふのは其處である、之を讀んで見たならば乾驚するのである、私は此子供に藥を飲ますことが出來ないからと云ふ譬を乳藥の譬で言ひ、龍の池の譬を龍池の譬で言ひ、佛敎には龍池の譬あり乳藥の譬あり、此二つの譬を以て此暗愚なる國民は能く悟さなければならないと思ふのである、此經は日蓮聖人は此意味に於て立正安國論を書き、又神國王御書などを御書きになつたことは御遺文の中に上がつて居ることがある、其點を詳細に紹介することが今まで缺けて居つたのである。

京都敎報

○本山布敎部にては六月一日午後八時より達夜門前布敎を開始し、村岡、有田、金光萩原の諸師交々起つて日蓮主義の宣傳に勞め思想善導に貢獻する所多大なるものあり、又國木健兒會を組織し、熱心に敎養しつゝあり、

○市勞務部の組織に係る度申會にては、木多犯下を屈請し六月廿六日午後一時より、京都府議事堂に於て講演會開催、犯下は人格修養と日蓮主義の題下に約一時間半に亘りて獅子吼せられ直に神戸に向はれたり、當時犯下は神戸御布敎中なりしも、今回は特に豫定を變更し出演ありしを以て、會員及府廳員は、其奮闘振りに感激せり、

雜錄

濠洲に於ける社會政策

海軍中佐　井上清純

三

アデレードと云ふのはサウスオーストラリヤの首府で、人口が二十三萬と記憶して居りますが、そこに參りましたときに名譽領事のアンガスパーソンスと云ふ人を訪問しました、此の人はサウスオーストラリヤ州の議員で、又同地に於ける有力なる法律家でありますから、話は餘程分りが良い、色々な話をした後に、私はメルボルンでもシドニーでも見損ふて要領を得なかつたから、アデレードの貧乏人を見せて呉れと云ふ話をしました。所がパーソンス氏の言はれるには、アデレードには貧乏人は居りません、又金持も居りません、併し金持は無いと言つても十軒位はありませうと答へられました。併し私は我らサウスオーストラリヤが富んで居つてもそれはあまり可笑ではないか、病で身體の惡くなる人間もあらうし、又老年で働けなくなる人間もあるであらう、然るに貧乏人がないと云ふのは變に思ふがと云ふ話を致しましたときに、氏は當地には貧乏人はそれぞれ始末を付ける方法がある、それをあなたに御紹介しませう、そこを御覽になれば貧乏人のない事が御判りになるであらうと云ふ話で、二通の紹介狀を呉れました、一通はベネボレントエンドストレンジャース、フレンドリーソティティの主宰者ピンセント氏宛のもの、一はプレミヤエンド、フタルスト、セクレタリーに宛て、マーギルホームと云ふを案内して呉れろと云ふ紹介狀でありました。私は其の翌日ピンセント氏を訪問しましたが、此のベネボレントエンドストレンヂヤースフレンドリーソヂイティと謂ふのは、無職業者を紹介したり、或は行旅病人貧乏人などを公私の救護所に送つたりする機關であるそうでありますが、餘り立派な家でもありません。併し氏は非常に喜んで私を迎へ、色々な說明をして呉れました、話の模樣では此の機關は餘程活動して居る樣であります、談話の終に氏は貴君の國では貧乏人はどうして救濟して居るかと云ふ質問を發せられました、之に對して私は日本では親は子が養ふ子がなければ親族

お姜ふと云ふ制度になつて居ると言ふた。所が氏は子や親族がなかつたときにはと云ふ二の矢を續きました。此の質問に對して私は其の場合には國家地方團體又は緣故者隣人などが養ふと答へたのでありまするが、實は衷心怪悅たるものがないでもなかつたのであります。一身上の事を申上げて恐れ入りますが、實は私に一人の妹があります、是は長崎で或役人に緣附いて居りましたが、不幸にも主人お男三人女一人の小供を殘しまして一昨年病死しました、固より俸給で衣食し、平常暮して行くのがカツ〳〵でありまするが故に、主人が死ぬると翌日から忽ち路頭に迷ふ樣な有樣に陷つたので、厭やでも應でも私が面倒を見なければならぬ事となり、已むなく私は郷里に送り遣へしまして月々仕送をして居るのでありまするが、長男は昨年から中學にも參る樣になり、費用は嵩むのに物價は騰貴に騰貴を重ね、月々送りまする金は四十圓が五十圓となり、六十圓となつても何遣り切れないので、先方にもそう〳〵言出し兼ぬる樣な樣子で、私の歸國を待つて居る樣な次第であります、如何にも尤な話で、二十錢の御米が六十錢七十錢となり、木綿の衣物が一枚十圓も十數圓もする時では、糧穀も賤へず、粥も啜れないのが當然でありませう。又私に一人の伯父があります、私は早く母に分れ、現在は父も母もありませぬが、此の伯父と申すは父親の弟で、小供は數人ありますが、今の世の中では自分一人の生活が中々容易でありません、爲に仕方がなく、心ならずも親に仕送りが出來ないので、是れ亦私が先年來仕送をして居りますが、近年の物價騰貴に際して其困つて居る事は當一通でないのであります。

併しながら是等の妹伯父は幸に私が銀行に勤めて給料を貰つて居ますから、不滿足ながらも今日迄露命を繋いで、子供も學校にやることが出來て居まするが、若し假りに私が無いものと致しますれば、斯う云ふ者はどうなるのでありませう、殘飯をさへ買ふとても出來ず、疊の數いてない板の間に一椀の食を一家四五人が爭ふと云ふ事はよく聞くことであります。曾て私が函館に役人をして居りました時も斯樣な實例を見たことがあります、タドイ樣でありまするが一寸申上度御座います。確か明治四十二三年の頃と思ひますが、函館に酒精の少なからぬ密輸入事件があつたのであります、其の節種々苦心をしまして漸く犯人の手先になつた者を檢擧致し、何故そんな惡い事をしたかと訊ねますと、惡いことは重々知つて居り、又御上に對して相濟まない次第でありまるが、實は昨年家内に死に分れ、此の寒い空らに（函館の冬は寒暖計が攝氏零下十度以下にも下るのであります）仕事もなく三人の子供はブル〳〵慄へて只飢しかつて居るので、親としては何分にも堪へられないから、誠に濟まぬことではあるが、止むを得ず犯しました次第で、定に申譯もないと云ふ答辯でありました。私は其の答辯に半信半疑を措いて、實否を

確むる爲に其の住所に走つたのであります、時に雪は盛降るし、凍つた雪は又凍つて靴鳴かする、頭から頭巾を被り外套で包んで居つても針が刺すやうな寒さでありました、聞いて參りましたのは蓬萊町か幸町かの路次であつたと思ひまするが、此の逢らしいと思つた所に間口九尺ばかりの怪しげな長家の中で子供の泣聲が連りに致します。覗るとはなしに戸の隙間から覗きまするとと六疊の室に二枚しか疊が敷てない、其の上に三つ五つ八つばかりの男女の子供が相擁して泣いて居るのである、火の氣と云ふものは爐にしたくもありはしない、身にはむさくるしいボロ〳〵寒さうなものを着て聲を限りに泣いて居ります。何せお齡共は泣くかと尋ねると、昨夕からお父さんが歸つて來ない、昨日からは御飯も食べない、お父さんは何をして居るのであらう、早く歸つて欲しいと云ふのである。是の悲劇に接しましては鬼であつても一掬の同情の念が起らずに居られないと思ひます、而もそれが私が檢擧した犯人の家庭で昨夕から父が遲らないと云ふのは、昨夜一晩街つて私共が訊問したから歸られなかつたのであります。親には罪があつても無心の子供には罪はない、何たる悲劇の事でありませう、私は職格なる職務上の地位に居つたのではありまするが、如何にも同情の念に堪ない、惡いことは惡いが、貧に迫つて止むを得ず犯したので、主犯者でもない上に、犯罪の證據も已に上つて居る事であるから私は直ちに歸つて深く將來を誡むると共に、聊か金を與へて釋放したのであります。思ふに斯樣な例は或は當樣の中に於かせられてもない事もないかと考へます。殊に今日の樣な物價騰貴に際しましては嗟や難儀をして居るものがあるであらうと思ふのであります。

扨右樣な事を考へまして、私は前に申上ましたやうに吾國では食べない者は夫れ〳〵食べる方法が付けてある、老年の者、或は貧乏の者夫れ〳〵救護の方法があるとは申しましたものの、顧みて實に冷汗の流れるを覺えずには居られなかつたのであります。時にピンセント氏は貴君が如何樣にお探しになつてもアデレードには貧乏の者はありません、英米等に於て觀るお知き貧民窟は天を驚け地を搖つても觀ることは出來ません、此の點は聊か私が誇るに足ると、恰もペンヂントン氏の言と同一の話をされ、尙一應マーギルホームをも御覽を願ひます、御都合では自分が御案内しても宜敷と申されました。併し私は前に申ましたアンガスパーソンス氏の手紙を持つて居りまするから此の方は斷りました。そこで翌日フタルスト、セクレタリーを訪ひました所が、議會關係の爲に其の日は居ないので、止むを得ず手紙を出して話の趣を申しまするとと、セカレドセクレタリーカラマーギルホームノチーフコンミツションに手紙を附けて與れましたから、直ちにコムミツションを訪ねました所が、委員長は喜んでマーギルホームに連れて行つて與れました。マーギルホームと

申しますのはアデレードの市街から約一里計り隔りました所の山の手に建てられた、病者や老年者などの救護所で、恰度私の行きましたときに收容の人員が約四百人であると云ふことでありましたが、其の設備の行き屆いて居ること、掃除の清潔なること、それに從事して居る人の熱切なること、食物洗濯娯樂機關寢床等の總てが貴に恐れ入つた程完備したものであります、逆も是は吾國の高い入院料を拂ふて居る病院などで觀ることは出來ない程で、私は大正四年騎察兵斯に屬り、蓋北病院に入院しまして、五等病棟の一等室に樣はつたのでありますが、其の時の經驗から見て、其の寢所の軟らかな事、洗濯の行屆いて居ること、食物卵肉類凡ての點に於て到底及ばないと云ふ感じがしたのであります。時に此の院長の說明されるには並には老者或は無能力者と云ふものを總て收容して居るので、其の費用は總て此のサウスオウストラリヤの政府から支出して居るのである、設備高燥に就ては不行屆もあると思ふが、尚充分能く親て置てくれと申されて、隅なく引廻されましたが、收容者中には貴に百三歲の女もありました、夫から百歲の男もあつたし、六十三年前に印度戰爭に出たと云ふ兵士もありました。是等の內で身體の動ける一ものは或に娛樂室にカードを弄ぶ者もありました小說を讀む者もありました、又高老で身體の全く動けないものは、顏に布を當てて じつとして居りました、而して夫が貴にオウストラリヤの人情りで無く、毛色の變つた支那人迄も收容して居ります、私の觀ました中に支那人が二人ありました、一人は老年者で、今一人は中老で五十二歲とか申して居りました、椅子に腰を掛け、煙草を喫みかけながら、熱と私の顏を視て涙を落します、どうして涙を流すかと云ふと、私を支那人と見て、自分の同胞が見舞に來たのだと思つたからなのです。そこで私はお前は非常な幸福者だ、支那の禍頭なり廣東を歩行くと、乞食みたやうに貧乏な者がゴタ〳〵して居る、病氣になつて誰も看て呉れる者はない、然るにお前は此の強い所に來て外國の政府から本國などには夢にも見られない斯樣な手厚い待遇を受けて居る、珍しき果報者だと申しました。所が本人も如何にも難有く思ふ、此の政府のお陰で身體の利かないのに安樂にして居る、誠に〳〵自分は難有いと思ふと話をして居りました。

四

話は前に戻りますが、斯樣なことがありました爲に、私は濠洲の最も優れて居るものは社會政策ではないかと云ふ感じが、强氣なから致したのであります。尤も他に二三話もありますが、斯樣なことを道々頭に浮べつつ、メルボルンの公園に參りました。メルボルンの公園は同市の人が非常に誇りとして居る丈に、貴に見事なもので園は內苑と外苑に岐れ、其の廣大なること實に驚く計りで、其の間に世界各國の珍らしい草木を配置して、中央の一番高い所にガベーメントハウス、即ち濠洲總督の官邸がある、前面には池があつて、其の池には私共の親たことのない所の珍鳥が群れをなして居る、日本で貴ばれて居る鶴鳥なども子供等に餌をねだつて居りました、又樹々に囀つて居る鳥は道行く人の食物の殘りを追ひ、惹人士が泰平を謳歌して其の樂を共にして居る有樣は、如何にも神人動物共に相和するとでも形容しませうか、彼の所謂娛樂世界とか云ふものはこんな所ではないかと云ふ感じがしましたと共に、ふと頭に浮んだのは彼の矢野龍溪氏の小說であります、明治三十五六年頃に讀んだもので、今に記憶して居るものが二つあります、一は右申上げた矢野龍溪氏の新社會、今一は今度お出でになつた柴大將の兄さんの著された日露戰爭未來の夢羽川六郎と云ふのである、此の二つの中の一つの龍溪先生の新社會の本が頭に浮んで來た、其の一文の構成は斯うである、金尾に民野と云ふ二紳士が廣大なる公園の中を散歩し、其の美觀に驚いて居る時に、一人の老人が出て來て舊社會の缺陷を指摘し、新社會の構成を說明すると云ふ仕組で、文章の骨子は自由競爭の弊害を說き、いやでも人類の社會はコーオペレーチーブシステムに作り上げねばならぬと云ふのが基礎で、其の文章の中には生れて教育を受けざる者なく、老て養を得ざる者なく、病んで醫藥を得ざる者なく、訴訟する者、犯罪する者殆どなし、人氣和樂にして風俗溫良、人々相愛する事眞の同胞の如しなど云ふ言葉があります、此の言葉はペ氏の言はれた事と符節を合するが如く、龍溪先生の公園は恰も此のメルボルンの公園に相當する、眞に私は茫然自失せざるを得なかつた、腕を拱いて沈思默考すれば、社會組織や、人類生活の缺陷が警鐘の如くに頭腦を刺擊する、又震災人畜の急に彷徨したる既往の經驗が胸中に顯はれて來る、とても公園の景色を探り、花鳥に戲れて居る餘裕はなかつたので、再び取つて返し、インターステートコムミッションに參りました。時恰も前總理の葬式が終つて、ペ氏は遲つて居られました、そこで私は一日に二度も三度もお伺ひすることは甚に恐れ入るが、先刻伺ひましたことに付て自分は腑に落ちぬことがあるので、其だ御迷惑ではあるが再びお伺した、願くは濠洲の社會政策の根本を承ることお出來やうかと云ふ質問を致したのであります。時に氏は夫はいと易いことであるが、濠洲の社會政策と云ふも一朝一夕に其の一切を述ぶることは容易でない、併し今自分の記憶に殘つて居ることをお話しやうと云ふて話をして呉れました事の大要は左の如くであります。

五

其の第一に話されたのは即ち最低勞銀の制度で、濠州の最低勞銀の制度は御承知の通り勞働者の取る所の給料の最低額を法制で決めて、それ以下では雇ふことは出來ないと云ふ制度で、現在の濠洲に於ては一週間三磅度乃至四磅度であるが、それ丈の金額は厭やでもお

うでも雇主は拂はなければならぬ、若しも被雇人か三磅四磅に價する能力がなければ、其の者は特に政府に願出て許可を受ければならぬ、是は舊來の十八世紀から行はれて居る所謂契約自由の原則を打破つたもので、舊制度の下に於ては人間を遂に商品化して、勞働の價値は其の一番少い所の給金に依つて支配されると云ふ結果に陷る、併しながらウキルソンの宣言の如く人類を商品視することは徹頭誤謬であるから、濠洲に於ては先つ此の舊制度を打破つて最低勞銀の制度を採用し、それが爲に先づ出來たのがビクトリヤ州のウエージボールドの組織である、尤も此のウエージボールドの制度は現在に於ては單にビクトリヤ州に行はるゝのみならず、ニユウテウスウエルス、サウズオーストリヤ等の各州にも行はれて居るが、先驅をつけたのがビクトリヤである。併しニユウテウスウエルスに於てはウエージボールドに代ふるに裁判の形式にて賃銀を決定しやうとした、即ち一千九百一年の頃勞働大臣のルータスと云ふ人が、アーヒツレーションエンドコンシリエーションと云ふ制度を採用した、此の制度に付ては故に詳說する暇はないが、要するに訴訟の形式を以て判決を下し、間接に最低勞銀を決め樣と云ふにあつたのである、斯く兩者共に形式及起源を異にして居るが、今日では兩者共に行はれる事になつて居る。尙勞働者の受くべき賃銀に對しては勞働者に差押權を認めて居る、即ち主人の金が勞働者の手許にあつた時に、主人が勞銀を仕拂はなかつた時には勞働者は其手許にある金錢を直ちに差押ふる事が出來る、併し主人は勞働者に對し此の權能は持つて居ない、今一つ勞働者に對して非常に都合の善い事は、勞働に關する判決の效力は雇主は直に羈束するが、勞働者に對しては其の意思に反して效力がない、即ち裁判の效力は片手落と云ふことになつて居る、從つて勞働者は自分に有利な判決でなければ訴さないと云ふことに屬するのである。

斯の如く一方に於ては賃銀の方面で勞働者を保護すると共に、他方に於ては八時間勞働と云ふことを早くから設けられた、一體此の八時間勞働と云ふのは正確な言葉ではない、寧ろ一週四十八時間の勞働と云ふ方が適切である、即ち現在では每日八時間働くのではないので、日に依つては八時間以上働く事もあり、日に依つては全く働かぬ事もあるが、結局一週間に四十八時間働くので、而して給料は七日分渡すのである、抑も此の八時間勞働制の根據は極めて簡單なので、一晝夜の時間を二十四時間とし、之れを三つに分ち、八時間働きて八時間寢み餘の八時間は修養又は休養を爲すのであるが、何故とんな制度を起したかと云ふと、給料は充分やつても時間がなければ結局人間を虐待することになるのであるから、そこで濠洲では早くから八時間勞働の運動が起り、シドニーで起つたのは一千八百五十六年である、何れにしても八時間勞働の運動は濠洲が早いので、始めは慣習であつたのであるが、後には判決或は法律で極まつたのである。要するに濠洲の政策は勞働者に多くの給料と、又充分の休養時間を與へて其の地位を高むることが目的である、故にストライキの如きも厳來より一歩進んで、其の多くの原因は給料問題より却て時間問題に移つて居る。(此の有樣は之を我邦などに比べまするとと實に霄壤の相違で、濠洲は實に勞働者の樂園であります、何處かの法律にありました樣に工場法は制定せられて居るが、肝要な所は施行細則で骨拔にして居る樣な事は見たくもないのであります)

六

次は老年者及無能力者の年金制度である、之は老人は六十五歲以上の者、無能力者は十六歲以上の者並に盲人に對して、政府は一年に三十二磅十志の年金をやる、併しながら此の金額は現在の物價騰貴に際しては少きに過ぐるが故に、之を增加しなければならぬと云ふ議論が盛である、而して聯邦政府の年金は一番大きな歲出の科目を爲し、戰爭で負傷した者に對する年金と加へると約一億計りになつて居る、內五千萬圓計りが老者及無能力者の爲に費されて居るのて、之を受ける人間がザット十萬ある。此の年金制度は英吉利のと少し違つて、英吉利の方は働く人間が積立をする、そうして國家がそれを補助すると云ふ形になつて居るが、濠洲のはさうではない、悉く國家がそれを支出して其の間全然慈善の意味はない、全く權利思想に基いて居る。蓋し相當年齡になつた者は是は社會に對し貢獻をして來たのであるから、後に社會から救濟される權利があり、又之を救濟する義務があるのである、尤も無能力者や盲人の方は慈善的である。

今一つは產婦手當である、即ち姙娠をして子供を生んだ女には其の都度五磅の金を政府が支出して居る、是は一千九百十二年に制定になつたので出產率の增加を圖る目的も包含すること勿論なるが、貧乏人が之に依つて救濟される事は誠に少なからぬ。(此の制度も吾國にも必要でないかと思ひました、名譽は申上げられませぬが、今から十年ばかり前當時三十圓か四十圓の給料を取つて居つた人の奥さんが、二度目の子供を產む時に姙娠をしたから隱くして置く譯にも行かぬので、主人に其の話をした所が、夫は非常に顏を顰め、復姙娠をしたのか、姙娠程惨いものはないよと言はれたと、私の家內に話をしたと云ふ事を私は復聞をした事があります、當時私は其の話を聽きましたときに實に涙が溢れる感じがしたと共に、國家の前途に憂慮禁じ得なかつたのである、子供が出來ることは皆人が悅ぶことで是程目出度事はない、家に依つては御祝もするのであるが、姙娠をするとお產の用意が入る、赤坊の衣物も揃へなければならぬ、其他近所の交際や何かに相當の費用が入るから、平生不足勝に爲つて居るものは到底之に堪へられないが爲に、斯樣な血を吐く樣な言

業も自然と出て來るのである、人生の悲慘實に之に若くものはなきと共に、國家の前途容易ならざるものありと感じました、夫故に若しも此の手當を充分にして置けば紛糾が怖い結論もなければ、顏を顰める人もなかろう、國家將來の爲にはどうしても斯う云ふ制度が必要ではないかと思ふたのであります）

以上は國家關係の事であるが、此の外私的のものとしてフレンドリーソサイテーと云ふものがある、會員は五十萬位であるが、其の家族が悉く關係をして居るから、濠洲人の殆ど三分の一は關係を有する極めて大なるソサイテーである、而して此の會員たるもの本人たると家族たるとを問はず、何か事があれば直ちに醫者が駈けつける、藥も與へる又必要があれば葬式費も支出してやる、誠に重寶至極なもので、貧乏人の助かる事が少くない。

斯くの如くして濠洲にては特殊の病者救濟の途を講ずると共に、國家直接立法に依りて一般的に生活の最少單位を保障せんとする政策を採つて居る、即ち生活必需品に對する政策で、濠洲に於ては生活必需品の價格は極力之を低下せんとする政策を執り、肉類や麵麭の如き生活必需品の値段は實に廉い、市場を調べられても分るが肉の値段が牛肉は一封度七片するのは高い方で先づ六片内外、兎一疋の値段が四片から五片。牛乳一合が一片半、砂糖は一封度三片半位にしか當らぬ、奢侈品の樣なものは高いが此の種のものは安いと思ふ、而して此の必需品の値段を下げさせる爲には義多の方法を執つて、ニューサウスウエル州の如きは政府で肉類の販賣所迄設けて居る、併し此の政策中の最も有力なるものは價格の公定の制度である元來價格公定の事は最も新らしい試みで、品物の價格を需要共給の原則に依らず法律の力で決定しやうと云ふ事には議論が少くない、又其の成績に付ても中々論難があるが、之に依つて生活の最少單位を保障せられた效果は大なるものである。

更に生產機關の公有並國家の管理と云ふ事は濠洲に於て最も重要なる政策である、即ち濠洲では所謂國家社會主義を實行して居るのである、更めて御說明する迄もなく濠洲は荒削りの新らしい處であるから、當はいくらでも得らるるので、自由競爭至極結構であるべき筈であるが、社會主義が早くより政治の根本義を爲して居ると云ふ事は一寸可笑しい樣である、併し此處が即ち濠洲立國の根本義のある處で、濠洲の社會主義は濠洲固有のものではない、羊や馬や兎が輸入品である如く、英國からの傳來のものである、貴君の知る如く我本國殊ち英國は近年まで極端なる自由競爭主義の國で、貧富の懸隔が甚だしく、資本家萬歲の狀態であつたので、濠洲に移住した多くの者は此の資本家の專制を嫌がつて逃出したものであるから、そこで此の社會主義と云ふ者を濠洲では治世の根本義に置いたのである、前に說明した義多の社會政策は見て此の原則から流出して居るのであるのみならず、國道鐵道土地大部分の國有、大地主制限、累進的所得稅、及地稅、勞働者設置、嚴重なる工場法等と、其の政策は殆ど數へ切れない程あるので、又意味深長のものも少なくないのであるが、是等の事は書物で御研究を願ひ度ひ、尙現在に於ては國民の主要食料である小麥や麵麭や砂糖も國家が管理をして居る、尤も是等の食料品などに對する管理の事は戰時の必要に迫られて行つた事でもあるが、根本義が國家社會主義から出て居るのは勿論である。

記事

尼港殉難者大追悼會

統一團及び顯本法華宗東京寺院聯合主催のもとに在京殉難者の遺族を迎へ、朝野の貴賓を招いて、七月四日午後一時より、統一閣に於て尼港殉難者追悼大法要を營み、續いて記念大講演會を開き、海軍中將佐藤鐵太郎閣下、陸軍大將大迫尙道閣下、大僧正本多日生猊下の御講演を乞ふ。

慘死七百の同胞が英靈を追弔せんとして集る敬虔なる多くの日蓮主義者は、定刻早くも堂に滿ち〳〵て、堂外遮立錐の地なきばかり、正に一千數百を數へしか。

莊嚴せられし齋壇、尼港殉難者の靈牌は三寶諸尊の御前に安置せられて、法燈赫々寶華淨潔、香煙裊々として昇ればさながら天涯の魂魄を迎ふにも似たり。

鐘鼓響き渡つて法會は開かれぬ、樂人が奏樂に迎へられて紫白の御僧五十、大導師日生猊下を捧して着席圓座し、恭しく諸佛諸尊を勸請して一實の御經を讀誦しそむれば、一千の會者又之に唱和して追悼の赤誠嶺々として凛ふ。

野口日主師拜起して追悼諷誦文を讀誦し給ふ。

南無本門壽量の本尊別而ハ未法の大導師日蓮大法將等大慈大悲知見照覽

抑に我が皇國軍人將士及官民同胞無量七百名露國激徒ノ爲ニ虐殺ノ難ニ遭フ、其慘狀聽人共ニ激怒スル所必ズヤ膚慄無カルベカラザルナリ彼等兇暴拔ニ到ル所以ノモノ抑モ何ゾヤ迷妄低劣ノ思想ニ囚ハレ自ラ進ンデ互相殘害骨肉相食地獄餓鬼畜生修羅ノ苦ミニ墮シ惹テ此慘虐ヲ敢テスルニ到ル、邪惡思想眞ニ可懼也。佛陀世尊ハ遠ク之ヲ鑑ミテ八萬四千一實ノ妙法ヲ宣說シ玉フ日蓮聖人ハ王佛一如國浮統一ヲ絕叫シテ今日アルヲ誡メ玉フ日持上人ハ斯法宣傳ノ爲ニ遠ク樺太及黑龍江ヲ渉ツテ深ク滿蒙ノ地ニ入リ玉フ豈大慈ノ至リナラズヤ。今ヤ我同胞孤立無援ノ地ニ恨ヲ呑ンデ冤レ屍ヲ荊棘ノ野ニ曝スト雖モ其碧血ハ流レテ我國民精神ノ進潤ヲ清メ國民ノ奮起ヲ促シ

我國民ハ大日本國建國ノ精神ト法國冥合ノ理想ヲ以テ世界人類永遠平和ノ使命ヲ果スニ到ルベキナリ然ラハ則チ諸氏一期ノ慘死ハ却ツテ萬世ノ光明トナルヘキナリ。是レ今回統一團一統無上誤解ヲ供ヘテ諸氏ノ英靈ヲ弔慰スル所以ナリ。況タバ法味ヲ奚受シ法命常ニ長夕護國ノ神靈トナリテ世界人類ノ爲メ我カ皇基ヲ護ラセ玉ヘ依而追悼眞誠文如件。

大正九年七月四日

尼港殉難者英靈追悼法會應上

法音朗々として響き佛陀善哉と讃し給へば結聚せる衆怨即ち霧散して法燈いや輝き、七百の英靈聖相を連ねて欣然靈山に捧護せらるゝが如し。

大導師の燒香に次いで遺族交々靈前に詣り拜跪して燒香す。孤老あり寡婦あり愁悲の涙一朝にして晴るべくもなけれど、擧國一齊追弔の鐘般々として日夜に鳴る。死してまた余榮あり以て諦觀冥福すべきのみ。

かくして唱題千遍。追悼の情いよ〳〵細かにして法味聖堂に溢れ、感應の妙果を納て玆に法會を閉づ。時正に午後三時。

次いで講演會に移る。此日密雲空を塞して一入の樗署なれば會衆の面頭流汗淋漓拭くに堪へざりしも一人の退座するなく一千の聽衆よく肅然たり。

開會の辭了るや、佐藤中將閣下登壇、同胞の慘死を痛まるるの至情眉宇の間に溢れて言々皆慈愛なり愛孃の死に描かれし曾感を物語られ、死者をして永遠に生かしむるものは弔者が正念感激と發心なり、慘死せる同胞に捧ぐる唯一の手向けは彼等の志は皇運の發展異域の開拓なり、愈々精進すべしと云ひ、惡業を憎んで其人を憎むべからず、日蓮聖人は平の左衛門こそ善智識よと宣ひし、逆徒こそ人道擁護國光發揚の善智識よ願くば仁慈の義軍を進めて王化を敷き以て同胞の英靈を弔はんと流石に法華眞仁の良將が述懷なり。

次いで大迫大將登壇せらる。生を捨てゝ義を取るは日本魂なり、赤穗浪士に賜ひし切腹こそ眞なる慈悲にして武士に賜へる不滅の頌德なり、死は一朝なれども之が及ぼす感化は無限なり、嘗てワルデック大佐が青島を開城して決然死守せざりしこそ武門の恥ぢ口惜しく思ひしに、今度同胞七百が尼港に於ける壯烈なる最後を遂げしはこれぞ我が國民精神にして永遠に輝き慟夫も赤起たしむべしと、一轉して我國が近々五十年に發揮したる文化の偉大と現在の重任とを語り、此間非國民的惡思想が跋扈せるを憤慨し健全黨の一致協力するの緊要なる矢先き此慘虐の突發せるありて愈々公憤の正氣を高めたるは七百の犧牲に無限の靈輝あるあり益々精勵して之に報いんと、渾身の力を罩めて送る赤誠聽者の肺肝をつく、

次いで本多日生猊下が榮衣の御姿は壇上に現はれ聽衆いや緊張し來る、巷頭時言に揭ぐるが如き御講演あり、熱烈愛ゆるが如く、叱聲絹を裂くが如く、そゞろ聖日蓮の御獅子吼も偲ばれて一千の心耳經として持ち義憤の情紹々たり。

かくして午後五時半會を閉づれど聽衆頓に去るべくもなく、三五集ひて相囁けるそも何事なりしか、遺族の方々も手厚く歡待して弔悼の本懷は十二分に達せられぬ。

一同散會せし頃より朝來の密雲俄に驟いで白雨一散、苦熱一夕にして除く。さながら結ぼれて霽れざりし七百の怨靈の法華一實の妙教に罰ふて正覺を開き、法蓮華に坐して遠く天空より喜び來りしが如し、悲しきが中にも味はるゝ聖き悅びといふべきか。

たちわたる身の浮雲もはれぬべし妙の御法の鷲の山風

統一團大阪支部發會式

洛々惡化し倍々溷濁して適從する所を知らざる思想界に立正安國的大旗を樹立して之れが統一の必緊必要を號呼し殆んど不眠不休に大努力を繼續せる我統一團の勢力は宛然大旱に雲霓を望むが如き機會を把握し『如日月光明能除諸幽冥』の金言を隨所に活現しつゝあるぞ賴母し、今春來名古屋、一宮、四日市方面の支部分團發會式擧行ありたるを首め今又大阪神戸方面が風を望みて支部發會式を擧るに至れり。

大阪にては六月廿四日を以て高津中寺町蓮成寺に盛んなる發會式を擧げたり。

本多大僧正大導師として上田山主、京藤熊井川崎師等出座し、多數會員參列して發會式法要を嚴修し、それより川崎師の開會の辭につゝいて、上田師祖書を拜讀し、各地より寄せられたる祝辭祝電を朗讀し、終つて本多猊下の團員の將來に對して懇切なる訓話と希望を述べられ、議事報告を終つて茶話會に移り、團員互に心情を投擲して清談數刻六時散會せり。因に祝辭祝電を寄せて聲援せられたる人々左の如し、

統一團本部代表井村日成、野口日主、小竹俊雄、大塚藏三郎、廣部永眞、寺門義次郎、原田日勇、笹川日堂、小林一郎、矢野茂、宮岡中將、佐藤海軍大學校長、齋藤日章、山岡日超、成島隆康、國友日榮、中村日鏡、鈴木日雄、萩原日道、金光孝碩、能仁事一、中川日史、吉永日洋、坪永日監、中部聯合布教團、木山布教部、有田安道、山本通辯、能仁一十、高田日暢、關田日城、堂亮雄、島田日州、京都天晴會、京都護正會、神戸統一團支部、明石橋香會、豐橋立正會、金澤天晴會。

右の內祝辭の二三を紹介せば

記辭

思想戰は今後日本及び世界の中心戰たるべし、尼港虐殺事件其證を示す、世界の眞平和は思想戰に依て決すべきなり、而も日蓮主義恐怖統一軍は其中堅にして而も全滅なり、此時此秋大阪統一團發會を開き、謹で祝意を寄せ、各位世界平和人類福祉の爲め大奮闘あらん事を。

大正九年伊國飛行航空隊天皇國に來るの翌數日

護大僧正野口日主

祝辭

今や世界の思潮は渾濁して其の歸趨を失ひ、皇國々民もまた其の影響を受け思想界紛糾實に其極に達せり。是時に方り日蓮門下憂國の志士相提携し奮躍して、これが救濟の業にあたらんとするは、誠に其の處を得たりと謂ふべく、聖祖の本願もまた蓋しこれに外ならざるべし。玆に聊か蕪辭を叙つて謹みて統一團大阪支部の發會を祝し、併せて團員諸君の捧持する旗の翩々鮮明にして、瑟々たる法鼓の山河を震動し、遠かに國民の惰眠を破らん事を禱る。

大正九年六月廿四日　海軍中將　佐藤鉄太郎

拜啓今回統一團大阪支部設立相成、本月廿四日右發會式御擧行之趣、目下世道頽廢人心動搖の折柄、國民思想善導に對する御心意しは爲朝家最急務かと來存候、何卒異體同心之御遂行に基き奮て御盡瘁あらん事を願ふ、玆に發會式之御盛擧を謹て御祝申上候　敬白

大正九年六月廿四日　海軍中將　宮岡直記

神戸に於ける要文講義

六月二十五六兩日夜カフエーオリエントにて開催、兩日共聽衆滿堂、場外に溢れ、入るに由なく落膽しつゝ歸り行く者さへ少なからず、場内は蒸熱堪へ難きにも係はらず、靜肅にして張耳よく大法鼓を聞く樣眞に未曾有の盛事たり是れ祝下が連月の御親教、其の無餘の辯才懇篤を極め言々句々活教訓ならざるなく、一度法雨に浴せし者をして、終に忘るゝ事を得ざらしめ、次回の日を屈指待望せしむるに因るは勿論、先月より御影と神戸の各青年會員中の有志克く結束して會期の前日より道路演說を遂行しつゝ眞の求道者を誘導するにも歸因せり。左に神戸一青年の通信を掲載して其の猛烈なる意氣込の概要を示さん。

前略先づ右方に日蓮主義宣傳と大書せる會旗に大提燈を掲げ法華經要文講義會の大立看板を左側にしたる中央の一段高き所より會員三井三吾氏、妙音朗々と聖訓最蓮房御書を誦し出し終つて氏は其眼盾なる態度にて入信の動機を明し且つ今日の歡喜生活を語つて先づ聽衆を奬勵せしめ最後に如來使の覺悟は吾人の根本觀念なりと敎へて降覆次に會員高島直彦氏は其の愛ゆるお如さ信仰を告白して終つて現代青年の迷々と文弱に墮落の淵に沈み流されつゝあるを慨して堪へざる者の如く論じ去りて聖祖の(元より存知の旨也)に寄せて平素の覺悟は人物修養の一語あるのみと更に本化主義はその最高の軌範を開示されたるなりと結んで降覆、次に會員保田太一郎氏は上人の「五尺に足らざる身を一つ置く所なし」と云ふ迫害中に終始一貫福へに主義宣傳に力められたるは偏なし國家及宗教の大義名分を明かならしめんためなりと絶叫したり「時にさしもの大講堂も聽衆に埋りたり」而も一々懇切に奥深に徹して論ぜられたり更に四恩を力說し特に衆生恩と共同責任の觀念を警論を交へて巧みに說へて鳴呼裡に降覆す。次に會員田邊謙二氏は社會主義思想の梗概を論じてその過れる本末を指適して笑殺したるは實に吾黨の戰士たり、猶その雷同的共鳴者を罵殺し、就中惡智識の敗恩を痛憤す、一片の赤誠豈に傍觀座視し得べきやと勵聲一番す、翼くば神戸市民諸君の猛省を促すと勸け日蓮主義を高唱す所次を鮮明して降壇次ぎに會員栗原辰男氏は大聖釋尊の芳躅を尋ねて信仰の源泉を汲み最後に身延に於ける御詠を上げて信仰の勝利を說いて降壇。田邊謙二氏最後に熱心傾聽せらるゝ大衆に謹んで謝辭を陳べて閉會を告ぐ時に十一時二十分なりき。かくして神戸の統一團支部は日に月に大發展しつゝあるなり。

六月中の巡廻教化

□一六月二日地方積場、豊小供會三百名、夜大人會三百名、講師野澤少將、關田日城。□三日同所、豊小供會三百五十名、夜大人會四百名、講師川島松雄、本多穢裁祝下、餘興講談。□二十四日川崎町女子高等技藝學校に於て、同校及尋常高等小學校の依頼に依り三年以上千五百名の爲二回に分ちて少年少女會を開催同會之辭、川崎町書記毛見熊太郎君、講師川島松雄、大池慈海、濱口會旭答辭笠間校長。夜尼港殉難者追悼法要並大講演會千五百餘名、滿員にて庭に溢れ八時半校門を閉す、川崎町未曾有の大盛會。同會の辭川崎町長小林五助君、尼港の悲慘、小原少將。尼港戰死者故第十四師團水戸歩兵第二聯隊第十一中隊一等卒綿引信二君遺族の參拜ありたり。餘興講談。□一二十八日品川鎮師町魚市場に於て、豊小供會五百名、夜大人會六百名講師小原少將、高木日曉□一二十九日同所豊小供會五百名、夜遊樂水難者追悼法要並講演會、八百名講師笹川日堂、高木日靖、餘興浪花節。

（かはしま）

◎自慶會月報

△五月十一日、名古屋市豊田織布押切工場、(男女工二百五十名)。人の心、本多祝下。結人の力、野澤少將。△同十三日、菊井紡績、(女工八百名)。人の一生、本多大僧正。忠實と云ふ話、山内櫻溪、△同日機器製造所。(三百五十人)本立道生、本多日生。負擔之美德、野澤悌吾。△同日、帝國撚絲(女工千三百五十人)。人と敎、本多講師。△同十四日、豊田紡績(八百人)女子と佛敎、本多祝下。△同十五日、豊田織布菊井工場、(二百五十人)。心の働き、野澤少將。未來ある女、山内櫻溪。△同十六日、山岸製材(五百人)、佛敎の大要(其二)、本多日生。我とは何ぞや、山内講師。△同十七日、熱田兵器(一千五百人)修養の三方面、本多講師。△同日、日本車輛、(職工八百名)。勞働問題私見、本多祝下。△同日、名古屋織造局、(三百五十名。思想戰の意義、本多大僧正。△同二十日、京都市鐘ヶ淵紡績、修養の大本、本多祝下。△同廿三日大阪市安治川職工所、(六百名)。人格の修養と佛敎、本多祝下。△同日、發動機製作所、(五百人)。修養の三方面、本多祝下。△同廿五日神戸市三菱造船所、(四千五百名)。勞働問題所見本多日生。△同廿六日、三菱造船、(四千名)。人生と修養、本多日生△同日、神戸製鋼所(三百名)。思想の撞撞と佛敎。△同廿七日、三菱内燃機製作所、(二千名)。國民性の涵養、本多祝下。△同日、三菱電

機製作所（二千五百名）。人と敎、本多大晉正。△六月十五日、名古屋市日本車輌、國民覺醒の秋、本多税下（聽衆五百名）。△同日、帝國撚糸、國民覺醒の秋本多税下（女工一千名）。△同日、松村製陶、日本文明の體系的發揮、本多税下（幹部約八十名）。△同十九日、豐田紡織、國を富とせよ、本多税下。處世の根本義講、山内講師（女工一千名）△同日淺野木工、三つの自覺、本多税下。死地に入て後活く、山内講師（三百名）△廿日、紡績器具、精神修養、本多税下△（二百名）△同日、名古屋勞工會發會式、（縣會議事堂に於て）敎化事業と思潮の方式、本多税下。戰後の勞働と思想問題、添田博士△同廿一日、山摩製材、報恩の道德、本多税下。感激精神、國友講師△廿二日、大阪市安治川鐵工所、國民覺醒の秋、本多税下（五百名）△同廿三日、宇治川電氣、人格の修養と思想の確立、本多税下（二百名）△同廿四日、住友鑄銅所、國民覺醒の秋、本多税下△同廿五日、神戸市鐘紡兵庫工場、國民覺醒の秋、本多税下△同日、縣立工業、人格修養と思想の確立、本多税下。△同廿七日、明石女子師範講堂、哲學的佛敎觀、本多税下。△明石公會堂、宗敎の必要と其撰擇、本多税下、（暴風雨を冒して集る者三百）△廿八日、神戸製鋼所、宗敎の必要、本多税下。

統一閣月報

○日曜講演、五月三十日、見佛論、木村義明、日蓮主義提唱、井村日成、思想問題の歸結と法華經主義、本多日生。六月六日、心の問題、木村義明、撰時鈔に就て、森川日修、思想問題の歸結と法華經、本多日生。六月十三日、唱題觀、高木日靖、思想戰の過去現在未來、野口日圭、思想戰の意義愈々分明、本多日生。二十日、日蓮主義淨土觀、川島松雄、日唱の生活、秋山乾英、信仰と勇氣、關田日城。二十七日、思想動亂ト法華經主義、星野純義、一大事因緣、木村日保、新疇の本義、井村日成。

○六月六日、午前九時より正午まで大崎日蓮宗大學大講堂に於て都下の聖龍門下子供會聯合大會を開き、佐藤中將閣下の御訓話其他二三の說敎童話あり、數々の餘興を演じて盛會なりき、當閣よりは法華經にて開顯せられたる舌切雀の歌劇を演ぜしが好評嘖々たり。

○統一閣所屬各區夜講は如例。

○二十九日、地明婦人會例會、本多日生税下の聖書要文の御講義あり。

因に跡見女學校前校長跡見花溪女史は、宿緣の尊さ、もと念佛信者なりしがそれに飽き足らで此程法華經に歸依して親しく日生税下に就いて研讀せられ、地明會にも入會し八十路の老軀を運んで每會參會して愈々法華一實の妙味を味はるゝは尚に有難きことなり。これお國り先生の祝福道證たるのみならず、佛敎の正統信仰が永く跡見女學校の最大綱領となり、門下幾百の優しき敎へ子が胸裡に當體の蓮華開敷して大聖人の所謂「女人となる事は物に隨つて物を隨へる身也」「箭の走るは弓の力、雲の行くことは龍の力、男のしわざは女の力なり」などの尊き自覺に起つに至らば、蓋し先生が敎育界に捧げられたる八十年の偉大なる功績にいやまさる百千萬億無量の功德たらんか。切に〳〵花溪先生の御長生と佛道御修行の果滿とを祈る。

中京地方の步兵戰

昨歲創立せられたる自愛會名古屋支部の活動と連係して、統一閣名古屋支部の目覺ましき奈闘力戰は開始せられたり、或は月々の法華經要文講義に、或は數回の大講演會に、或は各地方の分會創立に、本多總裁税下親率の下に、四十三瑚の巨砲は連續して打放たれ、猛烈なる思想戰はやがて中京地方より敵軍の凡てを驅逐し去らんする狀勢を示しぬ。すはや、敵の陣營は色めき亘れり、權門迹道の奴輩、數回の軍議を重ねて、小賢しくも應戰の準備を整ふると聞ゆるに、我はもと正法を立てゝ國家を擁護せんとこそ期せ、目指すば惡思想に捉はれたる者共なり、寧ろ國家を思ふ上に志を齊ふする同志は、一大建亘を作して思想戰の陣頭に立たんと願へるを、小さき宗團の陋習に捉はれて大義を辨へぬ奴輩の血迷へる軍議沙汰、おこの極みと思ひしが、先づ軍門の血祭りに一蹴して呉れんと、國友支部長を先頭に、客將山内櫻溪氏、丹羽陸軍少將、神戸より走せ參じたる熊井特命布敎師、其外清水長谷川伊藤の面々、外護の信徒數十と共に、まつしくらに敵の陣營に切り入りて、名古屋地方到る處に步兵の突擊戰は開かれぬ、左に概況を錄せん。

○七月九日午後二時より西春日井郡新川町永尾氏別墅文造寺に於て思想講演會。感激性の發揮、國友日城。思想の善惡、山内櫻溪。

△同十日午後七時より愛知郡八幡村大正座に於て思想講演會。聽衆場内に溢れて屋外に佇立するものあり、總數無慮九百。尼港事件に就て、丹羽陸軍少將。國民奮起の秋、國友文學士。歸眞、山内櫻溪。

△同日夜八時より名古屋市鷲山寺に於て。尼港問題に就て、國友文學士。思想統一の評準。山内櫻溪。

△同十一日午後二時より中島郡一宮町歌舞伎座に於て聽衆無慮一千。改造の基礎、熊井特命布敎師。國民的公憤、國友文學士。可齎思想力、山内櫻溪。

△同日夜七時より名古屋市妙行寺に於て。思想轉換の機、熊井本光。國家的懺悔、國友日城。感應的忠孝、山内櫻溪。

△同十二日午後七時より海部郡南鵜村茶屋新田重正寺に於て民力涵養講演會開催、聽衆約一千五百名、日舍の小寺なれば本堂庫裡に溢れ、境内に滿ちて、或は山門の外に立つあり、隣家の垣越しに聽くあり、地方未曾有の盛況なりき。民力と信念、熊井本光。尼港事件に就て、丹羽剛。修養の要諦、國友日城。勇猛精進、山内櫻溪。

此の夜三更月の庄内河畔を一行自働車を飛ばして歸る、櫻溪倘史の詩あり。曰く

三寸起風在是時　東濱西說鬪神機
漸敎舌鋒夜將半　復聽動車帶月歸

△同十五日午後四時より名古屋市旗屋小學校に於て。長谷川義一。感激精神、國友日城。

△同十九日午後三時より四日市市神の島新道新浦、安樂寺建立敷地に於て、國友管正を導師裝重なる尼港殉難者追悼法要を修し、更に同夜七時より同市圖書館に於て日蓮主義講演會開催。尼港事件に就て、陸軍少將丹羽剛。國民の奮起を促す、文學士國友日城。

枇杷島統一團分會講演

前號所報の如く枇杷島統一團分會發會式講演の際本多總裁の講演に對し、低級なる權門徒が其敵すべからざるを感じて、第二回講演會場に關し詮に陋劣なる妨害を加へんものと要策を運らすところありしが、左る事に毫も屈せず、六月廿日午後一時より統一團員濱島氏の別宅に於て第二回講演を開催したり。聽衆滿堂雨降つて地固まる結果を奏し、地方の人心彌々捨邪歸正の氣分を示すに至れり。

思想病敎治策　山內櫻溪
東西文明の基礎　丹羽少將
宗敎の比較及撰擇　本多總裁

編輯室より

◎統一原稿は名古屋市中區新榮町常德寺內國友宛送附を乞ふ。

◎各地方の目新らしき布敎宣傳、及社會事業と民衆敎化運動の通信記事を歡迎す。

◎編輯締切は前月五日限りの事。以上

廣告

千有餘座之布敎師著

本化妙道　大說敎書全

定價金五十錢　送料金四錢

初めて世に出でたる說敎書

本書は法華經專門古今無双の說敎書にして內容は立正安國論御書の大說敎を初め長敎坐の說敎は法華因悉く具足し殊に懇話快話滑稽等因緣譬喩比喩雜用等遺憾なき良書也

發行所　後志國古平郡古平町三六二　北天敎光社　振替口座東京四七五二番

日蓮主義　**戰士の伴侶**　一部金壹圓八拾錢

民心變動の兆頗る急を告げ日蓮主義の戰士に對し進軍を促すこと切なりこの要求に應じ戰士の伴侶として敎義の秘奧を開示せるもの實に本書なり書中論明する所は、思想問題と日蓮主義、宗敎信仰の要義、法華經の五大敎義、本尊の要義と其歸結、信行の要義と其歸結、得益の要義と其歸結、佛敎人身觀の概要、佛敎倫理觀の概要の八大編にして記述極めて懇切なり知法思國の戰士遠に一本を軍營に備へて韜略を謬ること莫れ。

思想の惡化善化

一部金六錢百部以上五錢の割送料一部金貳錢

本多大僧正撰

法華經要文

一部定價　並製　金參拾錢
上製　金五拾錢
送料　金四錢

本多日生師著書一覽

○法華經の心髓　金壹圓參拾錢
○日蓮主義の運用　金壹圓八拾錢
○聖訓要義　卷一、二、三、四、五既刊、各部金壹圓七拾錢　卷六壹部金參圓
○開目鈔詳解　上卷一部　金貳圓
○聖語錄　金貳圓貳拾錢
○日蓮主義の初步　金七拾錢
○東洋文明の權威　金壹圓八拾錢
○日蓮主義　金壹圓貳拾錢
○修養と日蓮主義　金壹圓貳拾錢
○日蓮聖人正傳　金壹圓八拾錢
○日蓮聖人の感激　金壹圓八拾錢
○日蓮主義の綱要　金壹圓八拾錢
○國民道德と日蓮主義　金壹圓貳拾錢
○優婆塞戒經通解　金八拾五錢
○大乘本生心地觀經通解　金八拾五錢
○國民敎化　金壹圓八拾錢
○法幢　金壹圓八拾錢
○戰士の伴侶　金壹圓八拾錢　各送料八錢
○法華經講義　上　上卷下卷各一部金貳圓八拾錢送料金貳拾四錢　下　一部金參圓貳拾錢十一卷迄既刊送料一部十八錢中午前金送料本要
○大藏經要義

購讀希望の方は左記へ申込みるべし
東京市外品川妙國寺內
大藏經要義刊行會
振替東京三一五九六番

す
持ち、
の者が日
際に、「ど
の境遇を新
即ち諸々
の覺醒

我

目

正しき理解と信念（時言）……本多日生
一、緒言…二、日本の地位…三、[illegible]の培養…四、[illegible]民精神の統一…
五、國家の現狀…六、資本家の覺醒…七、勞働者の覺醒…八、資本と勞
働との協調…九、交通[illegible]の任務…十、紛爭解決の方法
危險思想に對する警戒……本多日生
國民の覺悟……大迫尙道
佛教信仰の正統……本多日生
政治と教化……本多日生
日蓮上人教義綱要……井村日咸
滿洲に於ける社會政策……井上清純
記事、報道十數件

第廿四年九月號